



大震災から10年 変わりゆく街で



ろっこう医療生活協同組合

震災文庫

10

408

震災文庫 10 - 408

大震災から10年
変わりゆく街で

目次

新しい街に新しい暮らしで	赤松 徳治	4
--------------	-------	---

「協同の精神・協同の力」

ろっこう医療生活協同組合	理事長 鳴海 妥	8
--------------	----------	---

あのとときの老婆は今どうしている？

東京ふれあい医療生活協同組合	監事 堀本 秀雄	10
----------------	----------	----

阪神大震災から十年

三多摩医療生活協同組合	副理事長 佐藤 文秀	11
-------------	------------	----

組合員と役職員の協同の力で復興

福島中央市民医療生活協同組合	理事長 遠藤 勝弘	14
----------------	-----------	----

ろっこう医療生協の被災状況

写真で振り返る 震災10年		17
---------------	--	----



あれから10年

25

ボランティアさんにもらった「不思議な力」	武貞美智代	26
震災で失ったもの	大久保茂春	27
生きる喜びに感謝	大川 博行	28
避難診療所は震災の時の支えでした	もりくすを	29
労働組合の経験がいかされた自治会づくり	庄治 秀夫	30
米づくりで生まれた住民の輪	九富 禮子	32
元気をありがとう	中川 清司	33
大地は、まだまだ揺れている	岡本 光彰	34
一八〇度かわった	山本 幸子	36
震災に負けてたまるか	宮下 アキエ	37
阪神大震災と単身赴任	盛山 慶四郎	38
出来るものを出来るものから	古市 晃子	39
「歌」つてすごい力があるんだね	福田 純子	40
避難診療所でのお手伝い	野口 典子	42
皆様に感謝	大久保 幸子	43
あるいて あるいて	おーまきちまき	44
震災と障害者く復興の点検軸は何か	松村 敏明	46
六甲小での湯沸かしがボランティアのはじまり	小林 るみ子	48

人と共に生きていく時代に

谷口 尚恵 50

被災者が世論を動かし、国会を動かした

黒崎 隆雄 52

ラブ・パ راشュート

加納 浩美 54

「震災10年」は何を問いかけるか?

中田 作成 56

技術者の視点から見た阪神淡路大震災の教訓

ロート・ケイ・ヤン 58

震災直後の朝鮮学校

山村 ちずえ 62

そして 豊岡へ新潟へ

63

行政もボランティアも継続的な支援が大切

門永 直 64

熱い思いをトラックに積んで

岡本 秀美 65

資料

67

月刊労働組合(一九九六年二月〜四月) 理事長 鳴海 妥

68

阪神・淡路大震災五周年アピール

75

編集後記

76

新しい街に 新しい暮らしで

—震災十年目の願い—

赤松 徳治

敷布団の下から

押し上げてくる力の気配に目が覚め

はっと気づく間もなく その勢いは

ぐおおーっと音立てて 部屋を錐もみ状に襲い

天井まで突き抜けた。

ひとしきり激しく揺れた。

家具や本棚が倒れた。物が降ってきた。皿や鉢が飛び散った。

壁が崩れた。棟が落ちた。二階が一階になった。

ビルが傾き マンションが「く」の字になった。

地が割れ 道路が陥没した。電柱が倒れた。

高架が落下し 線路が歪んだ。高速道路が倒壊した。

地滑りが始まり 埋立地では液状化現象が始まった。

震えた。おののいた。怖かった。蒲団をかぶった。
落ちてきた物に押しつぶされて うめいた。

声を上げて 助けを求めた。脱れると 馳け出した。

……これらが 数秒間のうちに起こり 波状に続いた。
火が出た 紅蓮の海が街を襲った……

マグニチュード七・二

瓦礫と化した街。

死者 六千三百三十六名

負傷者 三万八千七百五十五名

家屋全壊 十七万九千二百八十四世帯

家屋半壊 二十五万一千四百八十八世帯

避難者数 三十四万二千六百二十五名……

電灯も 水も ガスも 電話も 杜絶え

電鉄・バス交通網も不通の幾日

余震におびえ 夜寒に震え ひもじさに耐え

明日を憂いて 思案にあぐねた。

……

あれから十年

街は回復したか。

暮らしは元に戻ったか。

大きな建物は建ったが

小さな更地は虫食いのように 今も街中に広がっている。

元の地に帰りたくても

帰れない暮らしがある

重く引きずる暮らしが 今も続いている。

今年もまた 中越地方を地震が襲い

各地に台風が吹き荒れた。

苦い経験は生かされたのか。

開びやく以来 天災や戦争が地上を覆った

でも 打ち続く災難を越えて

英知と協働で

人類は生き残った。

(油断と傲慢が災害を招いている)

六十年前も

十年前も

今も これからも

いちばん大切なのは――

平和と命。

いちばん大事なこと――

安らかな暮らしと健康。

人間らしく生きること。

そのために 人垣を作ろう。

それを守るために 手をつないで

人手による網目を作ろう。

忘れてはいけない 無念の日々 失われた犠牲

それらを償うためにも

知恵を出しあい

力を合わせて

襲ってくる災害に備えよう

わたしたちの祖先がしたように。

陽が昇り 朝が訪れるように

繰り返し手を重ね 和の心を重ねて

この街に 暮らしに 協働の砦を築いていこう。

作者紹介
あかまつ とくじ
詩人 神戸市灘区中原通在住



「協同の精神・協同の力」

ろっこう医療生活協同組合 理事長 鳴海 妥

一九九五年一月十七日の未明に起こった阪神淡路大震災。

死者六千四百一名。都市直下型の地震として未曾有の大惨事となりました。

※当時、灘医療生協の事業所は、灘診療所、六甲道診療所、それに本部事務所が入っていた組合員センターの三つ。各々に被害をうけました。組合員センターは使用不能となり、本部は灘診療所の事務・スタッフ室に移りました。六甲道診療所の入ったビルは全壊の指定をうけ、大々的な補強工事のため診療所はビルから出ざるをえず、喫茶「シルクロード」、安原さん宅を各々の方達の好意で借りることができ、十月再び戻るまで何とか診療を継続することが出来たのでした。

あれから十年。

ろっこう医療生協の活動、事業は、飛躍的に発展しています。事業についていえば、二つだった診療所が東雲診療所を加えて三カ所になりました。新たに介護事業に取り組み、二カ所の訪問看護ステーションと、ヘルパーステーション、通所リハビリテーション施設を立ち上げています。介護支援専門員の常駐する医療福祉相談室があり、サークル活動を始め多彩に利用されています。

このように発展してきたのは、時代の要請でもあります。震災がきっかけになったという面も大きいと思っています。

当時、事業所もスタッフもそして多くの組合員も各々に打撃をうけたなかで、取り敢えずやれる所から、やれる人数でやり始めるしかなかった。動ける組合員さん

たちに依拠してやれるだけの事はしようという状態だったのですが、そうなってみて改めて「動く組合員」の存在を実感しました。

「いつかは私達もあんなふうになりたい。」と思いながら、全国の先進的な医療生協の活動に学んだり、医療部会の提起する全国四課題に取り組みつけてきたことで、私達の医療生協にも医療生協らしい組合員が生まれてきていた。その事を震災後の一年間を通して、実感をもつて了解できたと言ってもよいでしょう。組合員に依拠して組合員と共に運動を創っていく、それでいいのだという事に確信をもてた事が、大きくその後の運動につながっていったように思います。

震災後の私達の医療生協は、全国的な支援にも支えられました。

医療部会が姫路医療生協に現地支援基地を置き、震災二日目の十八日には電話連絡が入り、十九日に救援物資の第一弾が届いています。これは市内の同じように被災した医療機関と比べて、格段に迅速かつ有意な支援でした。二十日には東京三多摩、東京ふれあい、福島中央市民の各医療生協から、あいついで来てくれました。三多摩の佐藤先生は午前の診察を手伝っていき、ふれあい、福島の人達は、救援物資で膨れ上がったリュックを背負って、西宮北口から線路伝いに歩いてきました。また、その後に行った組合員総訪問行動には、全国の医療生協から多くの人達が応援に来たのでした。

協同の精神、協同の力。そのことを「一人は万人のために、万人は一人のために」という言葉であらわしていると思うのですが、震災後の一年間は、私達の医療生協のなかにも、全国的な支援のなかにも、この言葉の意味と深さについて実践的に学びえた一年だったと言えます。

その意味で阪神淡路大震災は、ろっこう医療生協にとって、第二のスタートあるいは本格的なスタートになったと言えるのではないかと思います。

※私たちの医療生協は、灘医療生活協同組合として発足し、二〇〇〇年九月から、ろっこう医療生活協同組合に名称変更し、今日に至っております。

あのとぎの老婆は今どうしている？

東京ふれあい医療生活協同組合 監事 堀本 秀雄

一人の老婆が、倒壊した家屋の中で疲れた様子で座り込んでいる姿が今でも私の頭から離れない。あれから十年の歳月が経つ阪神淡路大震災。

私は、東京ふれあい医療生協を代表して地震発生五日後の一月二十一日、平田専務（当時）と二人で救援物資（医薬品・見舞金・食料品）を届けに早朝の新幹線で神戸に向かった、途中大阪梅田駅から阪急電鉄に乗り換えて西宮北口駅で降りて国道二号線に添って大勢の救援隊と一緒にたつて医療生協を目指して片道五時間歩き十六時三十分無事到着。鳴海理事長に救援物資を渡し伝言を伝え難医療生協の被害状況の説明を聞き、また来た道を折り返してきました。

当時を思い出すと、西宮市から芦屋市、東灘区、灘区と歩いていく程に被害が大きくなり、至る所で家屋の倒壊と火災発生によって焼け野原となっていました。帰り道一人の老婆が倒壊した家屋の中で途方にく

れている姿が今でも思い出されます。大阪には二十二時ごろ到着し宿泊となりました。

その後第二陣として、難医療生協の要請もあり「組合員の安否確認の訪問活動」に三月一日から四日まで九名の理事・班長・社保役員さんを派遣し取り組んできました。組合員の安否確認作業に当たっては、難医療生協の説明を受け、二人一組となり粉塵がひどいためマスクを着用し、地理不案内な六甲道診療所周辺を中心に組合員名簿と地図を頼りに一軒一軒訪ね歩きました。家屋が全壊・半壊で不在の人、家財道具を捜している人、火災によって跡形も無い焼け野原となっている所など悲惨な状態でした。しかし、一部破損、無事な家屋もあり組合員さんに会えた喜びと、遠方から来てくれてありがとこの励ましの言葉に支えられて、困難な訪問活動であったがやりがいがありました。なお訪問軒数は三百九十四軒、家屋の全壊四十九%、半壊・一部損壊二十四%、無事二十七%、七十%以上が何らかの

被害を受けていました。また組合員死亡も二件確認することができました。

第三陣として三月四日に藤田理事長を当生協組合員の総意を託して派遣し、義援金の届けと今後の復興対策に向けて東京ふれあい医療生協の役割を果たしてきました。

東京ふれあい医療生協では派遣された人を講師に阪神淡路大震災報告会を開催して、悲惨な現状報告と大震災が起きた時に自分は何が出来たのか、組合員一人ひとりが安全対策について議論してきました。最近では新潟中越地震が発生しました。悲惨な状況がテレビ・新聞で報道されています。行政の対応についても意見がありますが、私たち一人ひとりが常に安全対策についての心がけが大切だと思います。

私たち東京ふれあい医療生協のささやかな励ましの力が、兄弟生協の団結をより強め、難医療生協の底力を大きく発揮し「ろっこう医療生協」と改称されて、そして今日の新灘診療所開設に結びつくことが出来たものと信じております。

阪神大震災から十年

三多摩医療生活協同組合 副理事長 佐藤 文秀

一、一九九五年のあの日・・・
「とにかく行ってみよう」

自動車の中に、「六甲の水」も積めるだけ積みました。国分寺の酒屋さんで、買いしめてきたものです。「灘の仲間に、『六甲の水』を持っていくのも、何か変な感じだね」「いや、飲み水すら不足している、とのことだから、喜んでもらえるヨ」。その他に、衛生材料、医薬品、携帯ガスコンロのボンベ、乾燥食料などを、満載し、夕暮れの多摩を出発です。

夜の高速道路は空いていました。料金所ではどこでも、私達の車のフロントガラス上にある「緊急物資運搬車両」指定証明書を見た係員方が、皆さん「オッ、ご苦労様です。がんばってください。どうぞ、通ってください。」とフリーパスです。可能なかだけ、スピードを出し、西に向かいます。乗っているのは、春原副理事長（当時）、金子事務長（当時）、そして、私、佐藤の

三人。交代で徹夜のハンドルを握りました。

出発の日の午後、国分寺診療所内で、会議がありました。どうも、一月十七日に関西方面で大きい地震があったようです。被害状況がテレビなどを通じて少しずつ伝えられてきているのですが、灘医療生協と連絡できないのです。

小松卓三所長（当時）や小松清専務から報告が続きます。

「全然だめだった灘への電話が、本日（二十日）やっとつながった。幸い、鳴海さんをはじめ職員の皆さんは無事とのことだが、各診療所は被害を受けたらしい。六甲道診療所の方は特に甚大らしい。」

「灘診療所にけが人などがわんさとおしかけてんてこ舞いのようです。しかも、物資はない、トイレは使えない、医療器具も底をつく状態とのことですよ。」

「何か、俺達ができることは？」
「以前、国分寺診療所で、医者が小松先

生一人になった時、全国の仲間が、日替わりで、駆けつけてきて応援してくれたよなあ」

「そうだよ。とりあえず、必要と思われるものを持てるだけ持って駆けつけてみようよ。」

「電車は現地ではどうも動いていないらしい。自動車で行くしかないな」

「必要なものは？」「車の手配は？」

二十一日未明、大阪から、神戸に向かうにつれ、混雑してきました。高速を降り、超渋滞の中をノロノロと歩みます。大きな道路ではなく、脇道みたいな細いところを進みます。

「アッ、道路が浮きあがっている。」「高速道路が傾いて壊れている。」「エッ、あのビルの一階部分がつぶれている。あのビルは全部崩れている。あちらは、町並み全体が壊れている。」遠方には、何本も巨大な煙が立ち昇っています。車中の三人の眼が大きく固まり、顔が引き攣りました。

目指す、灘診療所近くの大きな道路に入りました。道路は超超渋滞です。しかも、ならば車両は、ほとんどが、救急車、パトカー、救援車両なのです。沿道いっぱいまで、くるくる回る救急灯の群れによる赤い

波がうねっていました。

一、活動し続ける医療生協

「オッ来てくれたの!!」金丸専務がこちらに声をかけてきました。朝八時、やっと、灘診療所にたどりつきました。周囲では、ヘリコプターの烈しい離発着の轟音が続いていました。診療所の建物は一見大丈夫そうでした。が、小西先生らに、中の案内をしてもらうと、あちこちに地震の爪痕がありました。生協のあるビルはあちこちで、破損面が露出していました。診療所の方でも、書類、物品の散乱しているところがありました。職員の方々の中にも、自宅が壊した方が多いとのことでした。下腹部が張ってきました。でも、トイレは使用不可の状態が続いていました。

短い時間でしたが、診療をお手伝いしました。金子事務長(当時)は、受付事務の援助をしていました。春原副理事長(当時)は、報告のため、被災状況や診療所の状態の写真撮影をしていました。

震災による怪我の方々は前日まで、一定処置を終わったとのことでした。しかし、定時の処方を求める慢性疾患の方々に混じって、火傷や小外傷の方々はまだまだ数多

く診療所にみえられていました。聞けば、この時間、他のスタッフは、避難所の巡回診療に駆け回っているとのことでした。

帰るべき時間がきました。あちこちに挨拶した後、その日仕事にきていた看護師さん方にレンズが向けられました。「震災に負けないで笑顔で診療にがんばる看護婦さんの写真を御願います。」皆さん、困惑したような表情になり、カメラの方をふりむいてはくれませんでした。無神経な表現を心から反省しました。

国分寺診療所に戻って報告しました。応援体制をとる準備をしました。その約一カ月後、灘診療所から要請があつて、小松卓三医師、小林誠一医師が、交代で、看護師さん達とともに、応援のために西に向う電車に乗り込みました。

三、震災二年后、 三多摩の保健大学に 来ていただいて

三多摩医療生協の保健大学の第一講目は、「阪神大震災と医療生協」というテーマです。

もう震災から二年余の時間が経過していました。講師として、灘診療所から、村上医師にお出でいただきました。村上先生は、

数多くのスライドを持ってきて、震災直後からその時までの取り組みを紹介してくださいました。震災直後からの組合員さんの安否と健康の確認、診療活動、避難所救護活動など、がんばり続ける多くの姿が、映写されました。

建物の被害が甚大で診療所が使用不可になっていた六甲道地域でも、喫茶店を借りて、谷口先生らの診療が展開されてきていました。

「いやー、震災直後、手ぶらで、職員が訪問にまわっていた時に、ある組合員さん達が、血圧計を持ってあっちこっちでがんばっておられてネ、『こんな時こそ健康をまもるのいつもの活動でしょうが!』と言われたとのことでしたネ!」と村上医師。地域に生協活動が根付いており震災被害を乗り越えていくパワーになっていることに、ジーンとききました。

震災後、「地震で、灘医療生協自身が、甚大な経済的被害を受けたのに加え、震災後、住む場の整備が進まず、街から人はいなくなる。組合員さんも患者さんも、もどに戻るどころか、減り続けるのではないだろうか。生協再建は、とても困難だろう。」との予想も聞かれました。しかし、これに反し、震災後、笑顔がひるがり、生協活動

がよりひろく、より深く、より力強くなっているという事実が、視覚的にも確認された、村上先生のすばらしい講演でした。聴講したみんながその元気をいただきました。

四、そして今年――

「一万人大集会」と

新診療所落成

「一万人が集まる医療生協の大集会」ってどんなのだろっ？期待に胸を膨らませて、JR六甲道駅を降りて、会場の都賀川に向かいました。「アレッ人がいない!?」川原の公園には、案内にあった出店も、人の群れも見当たりません。会場のひとつになっていた建物に入っていきました。中には、結構人々が行き来していました。見回すと、小西先生と高野先生が会場協で、お弁当を食べようとしているところでした。「先生、一万人大集会はどうなりました?」「ほら、ここで大集会をやっていますヨ。まあ、一万人が一千人になりましたけどネ」そう、前日から午前の大台風のため、屋外の催しものは全部中止になったのです。前々から、ろっこう医療生協の皆様が、本当にこの大集会の準備を懸命になされてきたのを知ることができていたものとして、本当に皆さん残念無念だろっナーと思いました。

中止にならなかった屋内の行事「アグネスチャンの講演会」に参加しました。世界の子供に関するアグネスチャンの訴えは、下手な評論家や政治家より、ずっと感動的で説得力のあるものでした。講演途中で、緩くなった涙腺からの分泌物を回りの人に気づかれないよう拭きとるのに、少しテクニクを要しました。私にとって、アグネスチャンの話もさることながら、それ以上に感動したのは、淡々としながらも熱い生協の前進を説く、鳴海理事長のお話と、それを共有する会場いっぱい組合員、関係者の姿でした。確かに、あの震災を乗り越えてきたろっこう医療生協にとって、台風なんか、問題にならないのだろっネ、と、ひとり納得しました。

数週間後、新灘診療所の落成式のため、またまた、神戸の土を踏みました。

うらやましいッ!!新灘診療所は、すばらしいものでした。落ち着いたデザインとやわらかい色調に包まれた建物の中には、各種入浴施設や調理場をもった入院施設とデイケア室。CT、パワリハなどの諸設備が完備。窓から神戸港もみえるこの館は、地域からの要望に真正面から応えうるお城でした。「ウフッ、ここ医局。ハハハッ。」本当にうれしそうな鳴海理事長さんでした。

見学におとずれてきた多くの方々に、スタッフの皆さんがいろいろな箇所ですばらしい説明しています。そのどの声も、張りが満ち溢れ、これからの意気込みを内包しておりました。

生田神社内での竣工記念レセプションに向かう途中、旧灘診療所に立ち寄りしました。そして、旧灘診療所と生協の建物との境にある天井を見上げました。そう、あそこは、十年前には、亀裂が入り、表層が剥がれ落ちて、パイプや壁の破損部位がむき出しになっていたところでした。あの日、小西先生が、「この建物、一見、地震の影響が無い様に見えても、あんなふうにならないうちに中まで衝撃が走っており、極めて危険なんですワ」と説明してくれた場所なのです。先生の説明の最中にも、近くの自衛隊ヘリコプターの轟音が響いていた…一瞬、私の耳の中に、今日の先ほどまでの新診療所内覧会の喜びに満ちた声と、震災当時の喧騒の音が、重なり合いました。

組合員と役職員の協同の力で復興

福島中央市民医療生活協同組合 理事長 遠藤 勝弘

今思えばちょうど十年前の一九九五年当時、私たちは高齢者を支える事業として、「老人保健施設」や「在宅介護支援センター」「デイサービス事業」等の研究をしておりました。

一月十七日の震災も、当時の三浦専務、半澤常務、澤村常務、私の四名で、富山医療生協の社会福祉法人とやま虹の会が運営する「老人保健施設レインボー」の視察の帰りの出来事でした。宿泊先の柏崎簡保の宿で早朝大きな揺れを感じ、テレビで神戸の映像を見たときは、一瞬夢ではないかと我が目を疑ったほどでした。街のあちろちから徐々に煙が上がり始めたのを見て、大変なことになると直感しながら福島に戻りました。

当生協発足以来からお付き合い頂いている灘医療生協当時の、「灘診療所」と「六甲道診療所」ともに大きな被害に遭い、ライフラインも止まり医薬品も不足し診療できないとの情報を得、急ぎよ二十日に三浦

専務と半澤常務の二名で準備もままならぬ状態で医薬品のみを背負い神戸に向かいました。

また二月に入り医療部会の「サンデー行動」の呼びかけにより、森組織担当と私の二名で、被災者宅訪問用としてマスクや家庭医薬品を背負いながら、現地における医療部会行動に参加し、その足で灘医療生協を訪れ引き続き組合員宅の訪問行動を行いました。

当時を振り返って参加者から次のような感想が寄せられています。

『私が被災地に行く事を家族に伝えた時、戦時下の東京大空襲を経験した祖母は、孫を戦地に送り出す思いだ、と涙したの思い出します。五日間の滞在中、様々な活動に参加し、組合員宅を訪問する中で、医療生協に対する期待や要望を、見ず知らずの私に涙ながらに話され、百万ドルの神戸の夜景が今は一万ドルにしか見えないけれど、いつかまた百万ドルになるまで僕等は頑張

るという言葉が忘れられません。一人でやる事の無力さ、協同することで叶う大きな力、生協で働く人間として大切なものを私は神戸で教えてもらった気がします』森課長。

また半澤氏は当時の当生協機関紙に次のように述べております。

『灘診療所まで甲子園入り口から約十三キロ歩いて行きました。道すがらの光景は目を疑わんばかりで、あの綺麗な神戸なのかと愕然としました。そんな中でも物資の援助や炊き出し・道案内等ボランティアの活動がありました。途中で私たちも水を頂きました。診療所に着くと跡かたづけもほとんどに、職員総出で被災者の救護に奔走しておりましたが、医薬品が不足し満足な医療ができない状況で、何か少しでも役に立ちたいと思いました。福島の皆さん、募金への協力をお願いします』

想像を絶する被災状況の中、地域住民の助け合いを中心に全国からのボランティアの支援、それに生協組合員と役職員の協同の力で復興に立ち上がり、今日の「ろっこう医療生協」を築かれた皆様のエネルギーと情熱に敬服しているところです。

当生協は、計画されていた「老人保健施設」や「在宅介護支援センター」等高齢者

を支える事業をすすめてきましたが、皆様のように震災などのトラブルもまったく無い中で活動でした。「ろうっこう医療生協」の早期の復興は、震災によってバラバラになった組合員や役職員が協同組合の優位性を信じ、多くの組合員のエネルギーを生協活動に転化することにより成しえたものと推察しております。そのエネルギーが新灘診療所づくりや、生き活きとした組合員活動づくりに脈々と流れているのだなと、うらやましく思っております。当生協も「ろうっこう医療生協」の組合員活動に学び、少しでも近づきたいと考えている今日この頃です。

貴医療生協の組合員と役職員の皆様の十年間の血と汗と涙の復興活動に敬意を表し、今後更に組合員活動の二本として発展されますことを祈念いたします。



灘区／村中トキ子

ろくごう医療生協の被災状況

今回の大震災が灘医療生協の施設と活動、そして組合員・職員に及ぼした被害は極めて甚大なものとなりました。主な被害概要は次のとおりです。

①事業所施設

【本部・センター】 灘区岸地通八一四一六（東鳩ビル）

・ビル「全壊」

・本部事務所は、灘診療所事務室に移設し本部機能を維持。

・会議室など組合員のセンター機能は中断。

【灘診療所】 灘区水道筋六一七二三（広岡ビル）

・ビル「半壊」

・玄関アプローチ・トイレ壁面の損壊、事務室漏水などの被害あるも、診療活動は維持。ただし、理学療法設備は物理的に使用不可。

【六甲道診療所】 灘区桜口町四一五一十二

（フォールラム六甲）

・ビル「全壊」→補修工事の上、再使用可能

・直後に、組合員さんの好意で近くの喫茶店を借りて診療を継続、二月中旬よりさらに近くの組合員さん宅を借りて仮設診療を展開。

・今秋より、補修後のビルに再入居し、診療再開の予定

②事業活動

※数字は九五年五月末現在

○診療所利用者（一日平均患者数）

・灘診療所 二二〇人→一四〇人

・六甲道診療所 九〇人→四五人

○出資金

・減額 三、三四七、〇〇〇円

○班組織

・一〇三班のうち九七班が機能停止

○機関紙配布

・一七四人→五〇人

③組合員・役職員

○組合員 死亡八五人、

転居（避難）一二六九人、

脱退五三人

○職員

五四人中

家屋全壊・全焼二二人

家屋半壊・半焼二一人

写真で振り返る 震災10年



震災に負けぬ子どもたち

灘区／大久保茂春





▲安否確認の組合員訪問に駆けつけてくれた全国の医療生協の仲間たち

▼避難所を巡回診療



▼灘区内あちこちで街かど健康チェックを実施



▼ボランティアの皆さんと一緒に炊きだし



年表

一九九五年（平成七年）

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
阪神淡路大震災発生 生協本部移転（灘診療所へ） 六甲道診療所移転（喫茶シルクロードへ） 避難所巡回診療 六甲道診療所再移転（安原様宅） 組合員総訪問	デイホーム六甲での炊き出し開始 避難所の組合員訪問 生協復興支援金（カンパ）の呼びかけ まちかど健康チェックの定例開催 （水道筋六丁目タイマー）灘店、コープ将軍通、六甲本通商店街 ふれあい弁当再スタート 健康診断の呼びかけ 復興ボランティアの呼びかけ 第十二回総代会（兵庫県福祉センター） 仮設住宅の組合員訪問 保健大学再開 出張散髪ボランティア 夏休み工作教室 生協本部再移転（月森ビルへ） 二時間人間ドック再開 二回目の組合員総訪問 六甲道診療所復旧（フォーラム六甲へ） 六甲道診療所の再開を祝う会 臨時総代会＆再出発のつどい（生田神社会館） 創立十五周年記念誌「この街に生きる」発行									

▼ピーク時に46,617戸の入居があった仮設住宅



▲創造的復興をはかる長期計画づくりに着手

震災なんかに負けない
組合員の生命と健康
を守る取り組みをダイナ
ミックに進めましょう

灘医療生活協同組合 創立15周年記念再出発のつどい



▶生協復興15周年記念月間に取りくむ

▲六甲道診療所は安原様宅を
間借りして診療を継続



一九九六年（平成八年） 1月 震災一周年のつどい（都賀川公園） 住専処理反対署名 2月 震災後はじめてのバスツアー（赤穂） 4月 第十二回総代会（動物園ホール） 5月 第三次五か年計画「創造的復興をみんなの力で」を決定 9月 橋本前理事長逝去 骨粗鬆症チェックスタート 10月 地震災害などに対する国民的保障制度実現署名 11月 臨時総代会（兵庫県私学会館） 訪問看護ステーション事業計画を決定	一九九七年（平成九年） 4月 訪問看護ステーションすみれ開設 5月 第十三回総代会（動物園ホール） 公的援助法実現署名 8月 クリニックつどい（ティケア）開設 9月 組合員一万人達成	一九九八年（平成十年） 1月 あの日から三年へ今こそ公的援助法の制定を（都賀川公園） 5月 第十四回総代会（動物園ホール） 被災者生活再建支援法成立 7月 神戸空港・住民投票運動 健康まつり 11月 トライやるウィーク受け入れ
---	--	--

▼介護事業第1号として
訪問看護ステーションすみれを開設



▲神戸空港住民投票運動では灘区事務局団体をにないました。

▼デイケア利用者の皆さんと一緒に王子動物園を散策



◀公的援助の実現を求めて

10月 東雲診療所オープン
9月 東雲診療所竣工式・レセプション
6月 第十七回総代会(ひょうご国際プラザ)

二〇〇一年(平成十三年)

12月 創立二十周年記念「紙ふうせん」コンサート
介護保険をよくする市民の集い
10月 クリニックついで移動
9月 訪問看護ステーションあんず開設
8月 法人名称を「ろうこう医療生活協同組合」とする
7月 創立二十周年レセプション
6月 医療生協センター開設
4月 六甲道組合員センターオープン
3月 第十六回総代会(ひょうご国際プラザ)
2月 介護保険スタート
1月 阪神・淡路大震災五周年アピール
仮設住宅解消
ホームヘルプサービスあおぞら開設
「みんなで中央区に診療所をつくろう会」結成
空港反対・市長リコール運動

二〇〇〇年(平成十二年)

12月 訪問介護事業、中央区診療所計画を決定
10月 臨時総代会(神戸市勤労会館)
介護保険申請スタート
6月 医療福祉相談室(ケアプラン作成等)開設
5月 第十五回総代会(動物園ホール)
1999年(平成十一年)



東雲診療所が竣工



ホームヘルプサービスあおぞらが業務開始



新灘診療所起工式



▲六甲道診療所の健康まつりに3000人参加

- 11月 新灘診療所オープン
- 10月 新灘診療所竣工記念レセプション
- 7月 新灘診療所上棟を祝う組合員の集い
- 6月 新灘診療所上棟を祝う組合員の集い
- 5月 第二十回総代会(生田神社会館)
- 2月 NPO法人「花たば」設立

- 9月 臨時総代会(原田の森ギャラリー)
- 8月 新灘診療所計画を決定
- 6月 一億円増資運動スタート
- 5月 第十九回総代会(灘区民ホール)

- 4月 水六駅前ふれあい広場開設記念・ふれあいギャラリー
- 5月 第十八回総代会(灘区民ホール)
- 7月 第四次五か年計画「ろっこう夢プラン21」を決定
- 10月 六甲道診療所開設十周年を祝う会
- 12月 東雲診療所開所一周年イベント

二〇〇二年(平成十四年)

二〇〇三年(平成十五年)

二〇〇四年(平成十六年)

地震直後から避難所解消までの 春日野小学校の様子

(神戸市中央区宮本通7丁目)



2月13日



1月17日(早朝)



3月12日



1月19日



5月17日



1月29日

一番大変なのは家を焼かれた人だろうと思います。テント生活は大変ですよ。
校庭からテントが減っていくのは嬉しかったですね。 (中央区/吉田和夫)



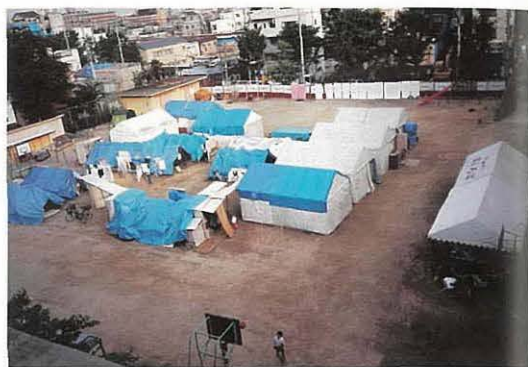
8月17日



8月31日(午前)



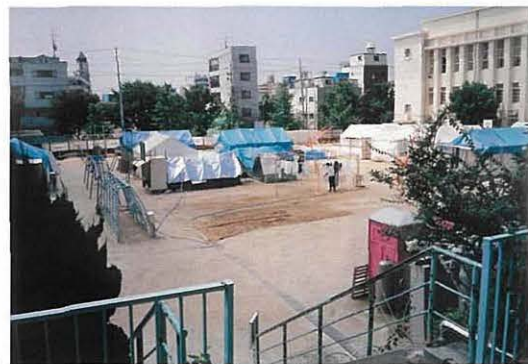
8月31日(夕方)



6月17日



7月17日



8月1日



▶二〇〇四年十一月、新瀬診療所が診療を開始



▲生田神社社会館で竣工記念レセプションを開催



▲竣工式には300人が参加

あれから10年



三宮そごう

灘区／大久保茂春



ボランティアさんにもらった「不思議な力」

西灘小学校の避難所の「お母さん」

武貞 美智代

震災当時はボランティアの方たちの協力のおかげで、避難所での生活や活動を乗り切ることができました。

震災から十年が経ちましたが、その方たちとはまだ手紙でやり取りをしたり、当時学生だった子が今は仕事のついでに家に寄ってくれたりします。今でも、当時西灘小学校の避難所と呼ばれていたように「お母さん」と呼んでくれるんです。

あの日、地震直後にみんなで避難所を目指して行ったのですが、閉まっていた入れませんでした。次男は学校の事を分かっているから「ガラス割ってもええなら、入って中から開けられるぞ。」と言うので、「割ってもいいから、とにかくみんなが入れるようにしよう。」と言いました。

避難所には給食の牛乳が残っていたので、子供とお年寄りで分けました。炊き出しも震災当日にはもう始めていました。避難所の近くにうどん屋さんがあつて、プロパンガスとか鍋が揃っていたのです。お父さんと次男が、倒れた家に食べられるものを取りに戻ってくれました。炊き

出しを始めたばかりの頃は、自分達には食べられませんでした。元気な人にも炊き出しの食事はまわりませんでした。

救援物資が届くまでしばらくかかりましたが、いざ届き始めると避難所にだけ集中して届いたので、救援物資が行き渡っていない公園に避難している人などに、台車に積んで配り歩いたりもしました。それが誤解を受けて中傷を受けたこともありましたが、「足りない物は学校に取りに来て下さい。」とマイクで呼びかけて回ったりもしました。

避難所の人数は最大で二千人ぐらいいになりましたが少しずつ減っていき、私たちは結局八月まで避難所に残っていました。仮設住宅が当たっていたんですが、子供の学校のこともあり、まだ半年滞に残っていました。翌年二月に引っ越しましたが、子供は転校せずに灘まで電車通学していましたので、帰りに寝過ごして姫路まで行ってしまった、なんてこともありました。

長男は震災で就職内定が取り消しになってしまいました。当時は同じ

ように内定取り消しになった子がたくさんいたのだらうと思います。

やっぱり自然の力には勝てませんが、みなさんの力があつてここまで立ち直れたんだと思います。野菜が不足していた子供が口内炎になった時、医療生協の職員さんが薬を持ってきてくれたり、寒さでの手荒れを気遣って手袋を持ってきたりしたことはとてもありがたかったです。

今回の新潟の地震はボランティアの対応などが早かったと思いますが、神戸の教訓が生きているのでしょうか。国からの支援はそんなに期待できないから、これからが大変だと思いますが、頑張りたいです。ですが、当時と逆の立場になって今度は自分がボランティアで動きたいと思っています。いざとなると動けないもどかしさもあります。

あの時、私達が避難所でいろいろな活動できたのは、やはりボランティアの方たちがいてくれたからだと思います。「不思議な力」があつたと思います。今になってみると考えられませんか。

震災で失ったもの

長年写真を撮り続け、灘区六甲町で被災

大久保 茂春

震災前は六甲町に住んでいました。震災にあつて、真つ暗で近所から集めても懐中電灯一つしかなく、カメラ機材を運び出したかったが無理でした。

六甲小学校へすぐ行くという話になって、私達が行った時にはもう講堂がいっぱいでした。校門のところにいたら、知らない人が毛布をいっぱい持ってきてくれました。

明るくなったらカメラを持ち出そうと家に戻ったけれど、もう軒下まで火がきていました。軒が連なっていて、路地が狭いから火のまわりが早かったのと、水がないから火が消せないのです。六甲町は西から燃えてきたけど、最終的に宮前市場のところで止まりました。宮前市場に消防団の人がおり、ちようど市場の北から水が出ていて、燃えないように建物に水をかけていました。そこで止まりました。

震災では大切な連作の作品も持ち出せませんでした。ポートアイランドの写真は整地前から撮りつづけていました。整理しようと思って並べてみたら全部ありました。こんな

を並べてみたら神戸の人は喜ぶだろうなと思いましたが、地震で全部つぶれてしまいました。着の身着のままパジャマにダウンコート、靴も持ち出せなかった状態で飛び出し、次にもどったときはもう燃えてしまっていました。

この十年何をやったかといわれたら、何もしていません。もうライフワークといえるものはありません。あんまり気力がなくなっていました。昔は何でも撮っておこうという気持ちでした。面白くなくても撮りました。なにかといえ

ば撮っていました。何もなくなるといふのは怖いのです。震災被害者の気持はよく分かります。みんな本心というのとは出さないけれど、考え方はみんな一緒じゃないでしょうか？震災の話は泣き言みたいで言いたくないです。よくなるものは何もないです。表面は取り繕っていても、やっぱりもどらないのです。年をとっていったら取り返し

がありません。新潟の人もかわいそうだと思えます。とにかく温かい物が欲しい、ただそれだけの瞬間の喜びを求めました。天災でしょうがないけれど、なんとも言えません。イラクの人たちのことも重なってくる。うつぶんの持つて行き場がありません。



灘区／大久保茂春

生きる喜びに感謝

灘区天城通の自宅で被災

大川 博行

午前五時四十六分、就寝中、突然「ドン」という衝撃音で、背中を下から突き上げられ、上半身が垂直に起き上がった。その瞬間に目が覚め、

「ああ、地震だ」と気付く。ガタガタガタ、ミシミシ、ドッドドーという地響きと共に家屋は物凄い揺れで、ガクンガクンと音を立てタンスが倒れそうになる。とっさに床から這い出て、毛布で身を包み中腰で転倒を必死に支えている時、他のタンスが転倒し、飾り棚の小物の装飾品が飛散、無残にも畳に叩きつけられ足の踏み場もない状態である。

まだ「ミシミシ」と横揺れが続いているその時、天井裏で「ドン」と物凄い音とともに天井の一部が破れ、土壁の固まりが落下、部屋の中は土埃りが充満し目が開けられないほどの異様な状態である。この先どの様な状態が発生するのだろうかと思うと気が遠くなり、その場に伏して無心に両手を合わせていた。

五分くらい経過したであろうか余震は続くが、妻の安否が気になり隣の部屋に入ろうとするが、ガラス障子が破損、押しても引いても動かな

い。何とか身が通れる程の隙間から部屋に入ると、毛布を頭から被って座っている姿を見て、「大丈夫か」と声を掛けると「はい」の返事に安心。震えている体を支えながら台所のテーブルの下に潜り込ませ、テーブルの上から毛布を覆い身の安全を確保した。

その時、息子がやって来て「ベツトの下に潜っていたので大丈夫やった。母さんは」と安否を気遣う声、「うん、大丈夫、このテーブルの下」と指差す私。日常会話も少ない息子との心強い親子の絆を実感した。断続的に余震はやって来るが、懐中電灯を探し当て部屋の様子を確認すると玄関の戸は破壊され動かない。便所では水洗タンクが破損してジャージャーと水が流れているが真っ暗なため、手の付けようがない。その時、息子が「素足では危ないから靴を履くように」と差し出してくれた。

午前六時過ぎ、屋外がほんのりと明るくなり、部屋にも明かりが入ってきた。暖房もなく寒い、気が立っていたのか空腹は感じない。各部屋の様子が分かるにつけ、何から手

をつけようかと頭を抱え込み、もしこれで火災でも起きていたらと思うと、生きた心地がしない心境であり、生涯忘れることの出来ない惨事であることを痛感する。ただ一つ不幸中の幸いというか、家族全員怪我なく無事であったことを喜び、感謝の念を禁じ得ない。

震災直後は意気消沈、明日への光を求めて右往左往している時、各種公共機関、ボランティア、自衛隊等大勢の方が全国から集い、厳しい環境の中、献身的な救出活動、生活支援に従事、私達被災者は「生きる希望と光明」をいただきました。

「喉元過ぎれば熱さを忘れる」のごとく歳月の経過と共に、ともすれば大震災も過去のものと忘れがちであるが、十年の節目の年を迎えるに当たり、当時を振り返り貴重な体験を教訓として、各人、各家庭、職場にて防災意識を高揚し、対策に万全を期し、生きる喜びに感謝しようではありませんか。

震災は忘れた頃にやって来ることを肝に銘じて

避難診療所は震災の時の支えでした

避難所・仮設住宅で健康チェックに尽力

もり くすを

わたしは定年退職後、労働組合の嘱託職員として働いていました。十五年前、頭がふらつき、当時、反原発運動で知り合った「ろっこう医療生協」橋本理事長（ご逝去）から避難診療所を紹介され、診療所の村上先生の診察を受けたのが、わたしと「ろっこう医療生協」との関わりのはじまりです。

村上先生はわたしが血圧が高いだけでなく心臓肥大症を指摘。すぐ治療してもらいました。そのあと阪神大震災が起き、被災したわたしは神戸大学へ避難。避難生活で精神的疲労から血圧が上がっているのではないかと心配していると、避難しているわたしのところへ避難診療所から、わざわざ血圧を抑える薬を届けてくれました。避難診療所が患者のことを思う病院だと信頼するようになったのはその時です。

もうひとつ、震災の翌年から高齢者障害者専用仮設に「何か行政に訴えることはないか」と、出入りしていたとき、避難健所は入居者の健康チェックをしていたが、神戸市が避難健所の保健部を廃止し、仮設住

宅の健康管理が出来なくなりました。思案にくれたわたしは、村上先生に相談すると、すぐ看護師二人と職員一人を毎月派遣して下さり、仮設住宅入居者全員の健康チェックをおこない、住宅がなくなるまでの四年間、仮設の人たちの健康管理をしてくれました。

健康チェックのあと健康管理について「紙芝居」で説明したり、お茶の席を設け、みんなの視線が茶菓子にいくと、看護師さんは「先に食べていいですよ」と勧めると、みんなは一斉に茶菓子を食べ出し「美味しい」のひと声。みんなは大喜び。お陰で診療所の健康管理は仮設の人たちの支えとなり、安心して仮設暮らしを過ごせるようになりました。

本来、仮設の健康管理は行政がやるべきものです。神戸市は、震災のどさくさに各区の保健部を廃止。被災者の命と健康を守る責任を放棄したのです。強い憤りを感じました。

七十歳後半を過ぎるといろんな病気をします。そのため避難診療所以外の治療を受けたりして点滴をしています。少し痛くて、イタイとす

ぐ場所を変えてもらいます。点滴には馴れています。血管の近くが紫、赤といったどすくろい皮膚にかわってしまいます。ところが避難診療所で点滴をしてもらってどの看護師さんに注射してもらっても、これまでやり直しなどだの一度だってありません。見事というほかありません。わたしはこれから生涯避難診療所で面倒みてもらいますが、いい診療所でよかったと思っています。



灘区／梅田英子

労働組合の経験がいかされた自治会づくり

藤原台第6仮設で自治会活動に取り組む

庄治 秀夫



避難所には三日おり、あとは、妻の実家にお世話になり、それから藤原台の仮設住宅に五月に入居しました。そこでは誰に聞いたのか、ぜんぜん知らない人から自治会づくりをしましょうと声を掛けられ、いざやろうとしたが何からしたらいいかわからず、有野支所の藤原さんに相談に乗ってもらい何とか自治会を結成しました。それでも労働組合運動の経験があつたので書類作りはなんとか出来、発行物は区役所の人に刷ってもらっていました。

仮設はみんなゼロからのスタートです。で、自治会運動しようと呼びかけたら、「庄治さん言い出したんやから」といわれて会長を引き受け、僕はできるだけ皆に迷惑がからないうような書類作りや役所への連絡は一人でやっている。と、「あいつばっかりやって、自分達はやらんでいいのか」という人がでてきてしまいましたので、これでは会長は務まらないと思い、三カ月で辞任することにし、役を引き受けてくれる人がいたのでお願いして後は裏方に徹しました。

自治会できちんとやったのは、仮

設に入居している人の名簿作りをし、仮設では何が起こるか分からないので各人の緊急時の連絡先は誰かなど聞いて回ってまとめて記録をつけていました。

僕のいた第六仮設は他に比べたらたくさん物資ももらいました。

県から救援物資のリストをもらって、どれだけ欲しいか聞きおるのであんまりあつかましく言ってもあかんと思っただけか五十とか書いて、千単位で申し込んでくれと返された、そんなこともありました。

それから藤原台の一七の仮設住宅と周りの三つの仮設住宅で自治会連合会をこしらえました。その連合会で市長との会談がありました。それぞれの自治会長からの要望をだしあいました。僕が、「神戸空港を凍結してでも市民の役に立つことをして欲しい」と言ったら、そのことが新聞に載りました。

ふれあいセンターが出来てからはモーニングサービスを一食五十円でやりました。仮設の人に手伝ってもらい、毎回五十人くらいの出席がありました。僕の仮設住まい二年で引

き継ぎをした時には、六万五千円ぐらいの余剰金がありました。

ふれあいセンターでは医療生協にお願いして月に一回来てもらっていました。いつも集まってくれる人は十人前後、血圧をはかってみたりその都度ナースがきていろいろな健康の話をしてもらったり、スライドで健康維持の話をしてもらったり。そういうことをしていました。第六仮設のなかを携帯マイクをもって呼びかけて回りました。昼間は仕事にいてる人が多かったので、仮設全体から見ると微々たるものですが参加してくれた人たちにとっては、悪いことはなかったと思います。

仮設住まいの間、不自由なことはあっても別に苦労とは思わないし、よい経験になったと思います。共に、自治会の発足も有野支所の藤原さんの力によるところが大きかったと思っています。

戦争のときの体験や労働組合運動の経験があったので出来たと思っています。



米づくりで生まれた住民の輪

西神第7仮設で自治会活動

九富 禮子

震災から十年目を迎えることになる。新潟中越地震がなければ平成七年一月十七日五時四十六分におきた阪神・淡路大震災も少しは記憶から薄らいでいった事と思うが、新潟地震を知り、その地震の瞬間が突然に襲ってきて今でも動きだす。

直下型地震でとっさの判断が付かず、宙に浮いたようで足が床に付かない。横揺れが続く身体に家具がある。家族に声をかけ、まだ暗いなか玄関へ、外へ出るのもひと苦労。やっとの思いで道路に出たが様子が一変していた。隣の文化住宅は二階が落ち、一階が破壊され死亡者がでた。東の六階建てマンションは半壊。下の駐車場は車がつぶれ音が止まらない。連絡がつかない友達を探し学校へ駅の方へと走り回ったが、疲れはて、家の前の道路へ布団をだして座り込んだ。その折に心配して市会と県会の議員さんが様子を見に駆けつけてくださった。その時は心よりお礼を申した。

半壊した我が家は余震があり住めない。最終的に五月三日に仮設住宅が四回目で当たった。西区でも最大

のマンモス仮設住宅で千六十戸もあり、歩いて全部回ってみると何か不気味な感じで落ち着かない。長靴をいちばん最初に買った。今も靴をだしてみると当時は思い出し、苦労したことを忘れないようにする。水抜きの仕事に追われた。市と交渉しても糠に釘だ。各区から集合した住民にも問題が集中して私たちまでストレスがたまる。

五月に倒壊した家屋を解体した。

三十五年も住み慣れた我が家が目前でなくなるのは正視出来ないうつらい思いがした。前年に屋根瓦を葺き、外壁を修理して老後は安心だと思っていたが、震災のためとはいえ根本から覆された。必ず再建すると強い決心で生活を送ってきた。

住民との雰囲気が悪く気分転換に近くの農家の方へ歩いた。田植えしている農夫に出会い、苗を分けて頂いた。仮設近くの排水用の溝に植付けして、施肥に頑張りつづけたので秋には二十株ほどの実りがあり、近隣の人々が珍しがって手伝いに加わってくれた。

やっ自治会も発足してバーベキュー大会を催し、楽しく会話が出来打ち解けた空気が出来てよかった。



瀬区／九富禮子

元気をありがとう

震災後、琵琶町まつりを始めた

中川 清司

震災後の琵琶町を語るとき、私にとって二つの大きな出来事があった。「びわポケット設置」と「琵琶町まつり開催」である。

町は大きく破壊され焼かれ、多くの犠牲者を出した。あの未曾有の被害の後、多くの人は町外に避難し、ちりぢりバラバラになった。そこに持ってきて区画整理事業の網がかかり、ますます戻ってくるのが困難になった。「コミュニティは無くなり、人々の気持ちも荒れていた。そんな琵琶町を想像するのは容易にできると思う。私はそれまで、琵琶町の住人という意識は皆無に近かった。しかし、ひょんなことから復興のまちづくりに関わるようになり、改めて町内（地域）を考えてみた。前述の容易に想像できる琵琶町の当時の現状において、行政とか区画整理とかと議論している中で、何かが足りないと思ひだし、その思いは日を追うごとに大きくなっていった。

悲しい、暗い、硬い、寂しいなどの気持ちはどこからくるのか。

そう、それは人のぬくもりが無いからだ。元気が無いからだ。それら

を取り戻すには、人が集まる場所と機会を創らなくてはだめなんだ、と気付いた時には「まつり」をしよう」と提案し、翌年の「びわポケット設置」に動いていた。

びわポケットについては別の機会に譲るとして、まつり開催を提案した限りは僕もボイススカウトのはしくれ、責任もってやりたかったし、絶対成功させたかった。なにせ琵琶町という小さなエリアでこのような企画は初めてであり、経験も無ければお金も無かった。助成金を申請し、団体やグループ、知り合いにできるだけ声を掛け協力を求めた。賛同する仲間も集まった。ボイススカウトは勿論、洋上大学同窓会、仕事関係、避難所ボランティア、そして灘医療生協（当時はそう呼んでいた）のグループなどなど。

特に灘医療生協さんには、デイホーム六甲が避難所になっていた当時から「炊き出し」のボランティアや、琵琶町復興住民協議会の役員会議事録作成など、継続的に琵琶町に関わっていただいていた経緯もあり、十月十日の「琵琶町まつり」には十数

名の方が焼きそばを焼いてくださった。ありがたかった。あの焼きそばの味は今でも忘れることができない。

その後、桜まつりや夏まつりを毎年開催しているが、ろっこう医療生協さんにはそれらどのまつりにもお手伝いをいただき、焼きそばを焼いていただいている。本当にありがたなことだと思ひ、お陰で元気をいただいているといっても過言ではないと思う。「継続は力なり」と言うが、琵琶町でまつり開催の企画が続く限り、この関係は継続していきたいと思ひ、語り継いでいかなければいけないと思ひている。



東灘区／山口琴代



大地は、まだまだ揺れている

岡本光彰（神戸横丁の唄うたい）



あつという間に十年経った

ほんまに、あつという間であつた。あれから十年……。何かをせねばという想いだけが空回りして、結局な〜んもできなかった。悔しいなあ。

でも、まあ、どんなに情けなくなつたって、僕は生きていくつもりでありまして、また、相変わらず力ネもチカラもなく、たいしたことはできませんが、やはり、何かをせねば、の想いは捨てがたく、これからどんなにすんねん、と一生懸命に考えております。

大地は、まだ揺れている

引用曲／アメリカ民謡
(Will the circle be unbroken)
作詞・作曲／岡本光彰



しんどいことはイヤなんや もめごとケンカも苦手やし
仕事もしっかりせえへんと 借金ばかりが 増えていく
しゃあけどやっばりどうしても なにかを始めにやおられへん
大震災があぶりだした 社会の多くの矛盾に 気がついた
この国が国民の命や 暮らしを守れないのは なぜだろう？
あふれる善意があるのに 救われない人たちがいるのは なぜだろう？

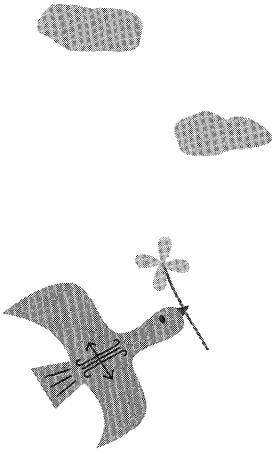
(Chorus 1)

こころを澄ませば 大地は まだ揺れている
うちひしがれたヒトたちが 新しい愛を 待っている

よくよく考えてみると 大変なのは僕達だけやない
弱者を踏んづけ蹴飛ばし 歴史は過去から未来へ ぐるぐる廻ってる
ちっぽけな自分を思い知ったが なにかを始めにやおられへん
えらい目におうてあらためて 世界が病んでいることに 気がついた
宗教は疲れはて科学は迷い ヒトはシステムに がんじがらめになり
あらゆるところで さまざまなもののバランスが 大きく崩れはじめている

いのち&平和をテーマに

ひとつ確実に言えることは、阪神淡路大震災の体験者として、生涯をかけて「いのちと平和」をテーマに活動するぞ!!ということ。「法」というものにアプローチしたいとも思う（平和憲法を守る運動もそのひとつ）。小泉首相や石原東京都知事なんて輩をリーダーに選んでしまってる、いまの日本は「法治国家」ではなく「違法の放置国家」になってしまっせ。あゝ、それと、唄もつづけます。辛いとき、しんどいとき、など。そんなときにこそ、唄が必要だと思いますから。「大地は、まだ揺れている」。十年経っても生きてるなあ。ほんま、ええ歌や。ダークな気分を振り払いたいで、ここで自画自賛させてやったださい（笑）



(Chorus 2)

こころを澄ませば 大地は まだ揺れている
乾いた世界が 新しい愛を 待っている

どんなに時代が過ぎようと どんなに豊かな世の中になろうと
すべての人が幸せになれる なんてことは ないだろう

しゃあけど やっぱり どうしても 何かを始めにゃおられへん
えらい目におうたけど ヒトたちの素晴らしさも 知ったんや
僕の答は決まったで 善なるものを信じることから 始めるで
自分を超え 家族を超え 町を超え 国を超える そんな愛もあるはず

(Chorus 3)

こころを澄ませば 大地は まだ揺れている
今も昔も明日も 新しい愛を 待っている

仲間同士争うのはやめよう 話し合おう 違いをわかり合おう

仲間同士争うのはやめよう 違いを認め合い ともに生きていこう

自分を超え 家族を超え 町を超え 国を超える そんな愛もあるはず
自分を超え 家族を超え 町を超え 国を超える そんな愛もあるはず

(Chorus 4)

こころを澄ませば 大地は まだ揺れている
今と昔と明日を つなぐ愛を 待っている



(Chorus 5)

Will the circle be unbroken, by and by, 甦無, by and by.
There's a better home a-waiting, in this world, 甦無, in this world.

* Chorus 1~4 を繰り返す

180度かわった

避難所、仮設住宅、復興住宅でボランティア活動

山本 幸子

震災前は楠丘町にありました。住んでいた文化住宅がつぶれて、鷹匠中学に避難しました。避難所でも救援物資を配ったり、炊き出しを手伝ったりしていました。以前は人のふれあいが嫌で、あまり口をきいたりしないタイプだったのです。何かしていると気持ちが悪くなったのです。被災前とは百八十度人間が変わったといわれます。

避難所から仮設住宅に移りました。最初はポートアイランドが当たったのですが、家族五人で一間は無理だといろいろ交渉して、結局六甲アイランドの第二仮設へ移りました。仮設でも食事会のお世話をしていました。今住んでいる新在家南の住宅に移ってから「大きなことはできないけれど」と言いながら、復興住宅でのお食事はもう十年になります。

医療生協の保健大学を受講してからは血圧などはかっています。それだけでもお年寄りには安心するのだと思うと思います。ただ私も専門家ではないので、間違いがあつてはいけなから、もちろんちゃんと「病院行って」といいます。この住宅でも孤

独死や自殺があります。色々なことがあります。仮設から集まってきているから一人暮らしのお年寄りが多いのも多いのです。住宅百四軒のうち四十五軒は一人暮らしのお年寄りです。男性は特にでてこないから分かります。表面だけで良くなったといわず、三歩下がって見て欲しい、訪問にいつても出てこない、死んでいるも分からない。市に交渉したこともありません。

医療生協の食事はみんな喜んでくれています。一人暮らしの人はみそ汁など炊かないから、「おかわりしてもいいよ」と言つと喜ばれます。ほんとうにいろいろなことがあります。

す。泣く思いもしました、悩みも聞かないといけないし、夜眠れなくなることもあります。冬は皆引っこ込みがちになり、戸も風で重くなり外出しなくなります。外に出ていれればそこで声を掛けることも出来ませんが、家まで足を運ばなければならなくなります。電気がついていても中で倒れていることがあるし、自分達が今まで踏み込むことはできませんから、大変です。市にも良い考えをだして欲しいと思います。入居させたら良いでは困ります。一人暮らしの方には誰でも相談してもらって、孤独にならないようにして欲しいです。



震災に負けてたまるか

今は、夫婦で岩屋青年会館を管理する

宮下 アキエ

震災の前は木造二階建てのアパートの一階に住んでいました。二階を人に貸していた四十年もずっとそこに暮らしていましたが、震災でつぶれて下敷きになりました。

二階の床が抜けてドカッと落ちてきました、上から落ちてきたものの重みで抜けられなくなり、真っ暗で何も見えなかったけれども、触ると丸いものが目の前にありました。死んだらいかんと思っていたら裏のお兄さんが飛び込んで来てくれて、ご近所の皆さんの協力で隙間からパッと抜き出してくれました。嬉しかったです。感謝でいっぱいでした。

振り向いて我が家を見ると、大事にしていたのに、一瞬のうちに無残な姿となり、悲しく悔しかったです。当時のことが生々しく思い出されまです。命が助かった、生きていますんだと少しずつ実感が湧いてきました。それとともに、腰と胸の痛みがひどくなりました。もう何もいらない、衣服もタンスも道具もいらないと思ったけれど、子供達がガレキの中から泥まみれの物を少しずつ取り出してくれたのを今見ると、懐かしく愛

着が出ます。四十年も住んだ家だったから、葬式でもなんでもあの家です。上げたかった、悔しかったです。

病院通いの間、子供のところに身を寄せていましたが、病院通いも辛かったです。早く良くなるう、寝てはおれんと痛いところを撫でたり、さすったりしながら、一心に祈りました。家族はもちろん、弟・妹・友人・知人と多くの方々の物心両面の温かい思いやりと、力強い励ましに支えられて、頑張ろうと思いました。三カ月もしたら体も少し良くなり、歩けるようになったので力も出てきて、「負けてたまるか、絶対頑張るぞ。自分の持てる力でもう一度家を建てる」と心に誓いました。

あるもの全部あつめて家を建てました。四、五、六月の間、避難所にいまして、それから西神中央の仮設住宅に移り住みましたが、家が出来てもどってききました。自分の力で立ち上がらないと誰も助けてくれない。自分で頑張らなあかん。

震災前は働いていませんでした。子供が四人いましたし、菊が好きで菊のおばさんといわれていたほど熱

をいれていました。今は人の紹介で震災後、岩屋青年会館の管理の仕事を始めて、もう十年になります。ここにいるとたくさんの人に会うことができて、勉強になります。日々、勉強です。

地震がなかったらと思って生きているんじゃないんです。震災から十年で、七十歳が八十歳になりましたが、楽しい話、希望の出る話をするようにしています。いつまでもよくよくしてもしようがない。上を見て生きています。



灘区／宮下アキエ

阪神大震災と単身赴任

工場閉鎖で神戸を離れて名古屋へ

盛山 慶四郎

私の勤めていた住友ゴムは、あの阪神淡路大震災で生産設備に深刻な被害を受け、工場閉鎖になり約九百名が神戸を離れることになりました。

私は、愛知県豊田市に転籍が決まり、名古屋工場に平成七年四月に赴任しました。

住み慣れた神戸を離れ、新しい職場に向かう気持ちを思うと不安と動揺でいっぱいでした。

震災で思春期の子供と家庭を守る女房と別れるさみしい体験をしましたが、家族のためにがんばることにしました。

そして今年、無事定年退職を迎え、神戸に帰ってきました。

今、新潟中越地震の被害を見聞きする中で、神戸の震災後九年間の感想なり思い出を話したいと思います。

まずは名古屋工場に来てビックリしました。全工場上げて歓迎と励まして迎えてくれました。励ましの事例を幾つか紹介します。

一つ目は、転職先の仲間全員がやさしく思いやりがありました。

二つ目は、仕事が終わった後、さびしくなり、毎晩神戸の仲間と酒

を飲み、各々の職場の悩みなどを話し合い、新しい仕事が覚えられないとか、人間関係がうまくいかないとか、家族がどんな生活をしているとか、仲間の悩みなど、毎日酒を飲み、励まし励まされ約一か月つきました。毎日、二日酔いで会社にいました。が、私の職場は全員の理解があり、君たちの気持ちは良くわかったと理解してくれたこと。

三つ目は、作業終了後にトレーニングルームで若い人達とスポーツを楽しみ、指導なりする中で若い人からも信頼され励まされることも多くなりました。また、旅行、ゴルフなどにも行きました。

私の趣味は釣りですが、どこで聞いたのか、多くの釣り好きの人が職場に来てくれて、よく誘ってくれたことが楽しい思い出になりました。

それから、三十数年前に神戸工場で働いていた仲間が家に招待してくださり食事をいただいたこと。仲間の家族は二世帯住宅が多く、親子、夫婦関係について多くのことを学び、本当に多くの人に励まされた九年間でした。こんな優しい労働者に接す

ることが出来たことを大切に、今後に生かしていくつもりです。

しかし、悲しい出来事もありました、少し報告させてもらいます。

孤独死一名、職場の仕事になじめず、また相談する仲間もいなかったと想像できます。会社に出勤しないので、家に行くとき酒の空ビンが部屋に散乱していたそうです。震災後、会社・組合は何一つ心のケアがありませんでした。私達を含め大きな課題です。

また、病気で二名の人が死亡しました。この問題も家族と一緒にいれば早期発見できたのではないかと思います。また仕事で人間関係がうまく行かずストレスがたまり病人が多数でました。

単身赴任生活は、孤独で相談する相手も無く、色々と思います。どんなに苦しくても家族と一緒に生活しないとダメだと私は思いました。

出来るものを 出来るものから

避難所から始まった、私のボランティア活動

古市 晃子

震災時、たまたま早く起きていて被災しました。ガスの臭いがして「タバコに火をつけないで!」と言ってまわりました。

ご近所の親しい友達の様が見当たらないので、その人たちを探している間に避難所はいっぱいになり、六甲出版の駐車場で近所何世帯かで共同生活をしていました。

お料理の上手な方がいつも炊き出ししてくださったので、温かいものが食べられました。それと言うのも親類や遠くの知人が苦勞して食べ物も多く持参してくださったお陰でたいへんありがたく、ひもじい思いもせずなんとか過ごす事が出来ました。

その後、物資が届くようになり西灘保育所で弁当とパンを岩屋北町の人に配る手伝いをしました。寒いという気持はなく、ただ必死でした。

四月になると会社から連絡がありました。そろそろ皆様も落ち着いてきたようなので弁当配りのお手伝いを別の人をお願いして、会社へ勤めながら自分の時間のある限り路上生活者の食事や日用品等を提供するボランティアを一年ぐらいしています。

た。

その後、大倉山の県営住宅仮設教会で食事会のときに医療生協の健康チェックのボランティアを続けておりました。今は教会の転居でお休み中です。

ボランティアは、ほんの少しのやさしさと奉仕の精神があれば誰にでも出来ることだと思えます。震災時は何か自分出来る事を考え、出来るものを出来るものからお手伝いをと心掛けました。

色々な人たちとの出会いや会話をたのしみ、心が豊かになるのがいちばんの幸せだと思っています。人生は急がず、ゆっくりとゆとりを持って生きてゆくことに心掛けております。



「歌」ってすごい力があるんだね

保育士として生田川保育所の再建運動に取り組む

福田 純子

今でも思い出す、あの日のことを。いつべんに仕事が変わってしまった。私が在職していた保育所が入っていた市営住宅は、保育所もろとも全壊した。その日から保育とは全然関係のない仕事が始まった。

本庁に、小学校に、公園にと避難していると思われるところへ在所児の安否確認に、それが終われば、障害児さん、高齢者さんの安否確認に土曜日も日曜日も出かけた。また義援金の交付関係もした。北へ南へ東へ西へとよく歩いた。避難所にいる子供たちの保育もして回った。

その後、ぼつぼつ営業を始めた大安亭市場にいる保護者から保育所の再建を求められた。保護者にアンケートをして、四十二人中十六人から返事が戻ってきた。やっぱり再建を要望しようということになり、保護者に再建要求の署名を取り、保護者とともに保育課に足を運んだ。まちづくり推進課へも再建を求めた。しかし、周囲の民間保育所も含めて対応できているという理由で、要望はとつとつ聞き入れてもらえなかった。そしてその市営住宅はきれいに再建

された。保育所抜きで。

一方、晩になって帰宅という生活だった私は、今後また何かあると大変と思い、地域とつながりを持つため、自治会に入り、周囲の人たちと付き合うようになった。ふれあいセンターも出来上がり、合唱団も出来た。私は入団した。小学生から大人まで入り混じったのユニークな合唱団、そこで歌う歌とは、震災で傷ついたみんなの心をいやし、慰めてくれるものとなった。指導に当たってくださるの、当時港島小に在職中だった室屋先生他三名の教諭。今まで歌った歌に心にのこる歌がある、それは、震災から二カ月後に室屋先生のところへ手書きの楽譜がファックスで届いたもの。それは今では世界に広がっていった歌「幸せ運べるように」です。

室屋先生の大学時代の同級生臼井真先生からだった。「歌ってみて下さい」と書かれていたそうです。体育館には避難者が大勢いた。「こんなときに合唱なんて、いけないことをしているのではないか」先生は、後ろめたさを感じながらコーラス部

の活動を再開され、そして我々ふれあいセンター合唱団でも指導してくださった。港島たそがれコンサートで歌った。「心の中で叫ぶように、毎日を大切に生きてゆこう、みんなもね」と呼びかけながら、歌っていて胸があつくなり、涙があふれ、声がつまりそうになるのを必死でこらえ、歌い終わった時の全身が熱くなったのを今でも忘れられない。それからも歌いつづけている。まだ神戸はもとの姿に戻っていないような気がする。もとの姿に戻るまで、私は熱く歌いつづけたい。



中央区／福田純子

しあわせ運べるように

作詞・作曲 白井 真

1.

地震にも負けない 強い心をもって
亡くなった方々のぶんも 毎日を大切に生きてゆこう

傷ついた神戸を 元の姿にもどそう
支え合う心と明日への 希望を胸に

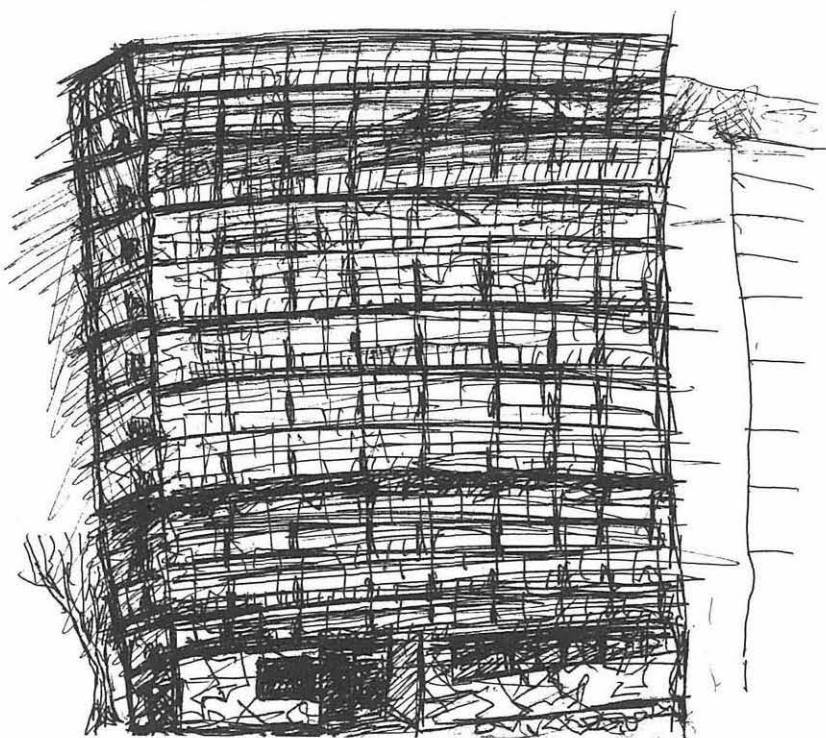
響きわたればくたちの歌 生まれ変わる神戸のまちに
届けたいわたしたちの歌 しあわせ運べるように

2.

地震にも負けない 強い絆をつくり
亡くなった方々のぶんも 毎日を大切に生きてゆこう

傷ついた神戸を 元の姿にもどそう
やさしい春の光のような 未来を夢み

響きわたればくたちの歌 生まれ変わる神戸のまちに
届けたいわたしたちの歌 しあわせ運べるように
届けたいわたしたちの歌 しあわせ運べるように



6階部分が完全につぶれた市住13号棟
この1階部分が生田川保育所だった
カット／福田純子

灘診療所でのお手伝い

職員の食事を作り続けた

野口 典子

震災の日、いつも寝ているのはたまたま逆向きに寝ていたので助かりました。身体の上にタンスが落ちて、同居している娘夫婦が助けに来てくれるまでは、身動きが取れませんでした。いつものように寝ていたらきつと頭の上にタンスが落ちてきて、死んでいたかもしれせん。好運だったと思います。

まだ家を建てたばかりで震災にも耐え、我が家と隣の家は、周りの家がつぶれているのに建ったままでした。ご近所みんなが学校に避難する中、どうしても家を離れたくない気持が働いて家におりました。

偶然前の日の炊き込み御飯が、そして水の備蓄もペットボトルにためてあり、何とかかなと思っていたら、その夜九時過ぎに電気がついてテレビを見ることができ、長田の火災や各所の様子を知りました。とそと、近所から火が出て、消防車が十七台も来ました。中には大津ナンバ―もあったといひます。ところが水がないので消火活動ができないのです。私の家にも火の粉が降りかかってきてきたので、屋上にある植木用

にためていた水を必死でまきました。途中で風向きが変わり、私の家は大丈夫でしたが南側の家四軒が燃えてしまいました。

あくる日、息子の会社の人達がおにぎりと水を持ってきてくださいました。娘が機転を利かせてあの家は何人、あそこは何人という具合に配って回りました。気が付くと家の分は残っていませんでした。でも、いまだにあの時のおにぎりの味は忘れられんご近所の方に言ってもらえます。

一週間がたち、長女のマンションのある大和町まで行きました。道路がまだ通れないところがいくつもあって、三時間ぐらひかけて歩いていきました。その帰りに桜口の近くを歩いてみると、今思つと和田さんだと思つのですが立つておられて、聞いてみると困つてると言つておられました。

私のところは娘夫婦が仕事に出て行くとは一人になってしまいました。周りの家はつぶれてしまつていて、私の家だけ大きく見えしました。

五合炊きのジャーがあり、電気と

水はその日から出ていたので炊き込み御飯をつくつて灘診療所へ持つていきました。そうしたらあくる日に診療所の職員さんが備蓄米をもつてきて、ご飯だけ炊いて欲しいといわれ引き受けました。それが日課になり、それを診療所までとどけて、その足でダイエーに買ひ物にいつて次の日の材料をしいれました。そのうちにごから聞きつけたのか、「野口さん運ぶの手伝うよ」といつてくださる人が現れたり、家に帰つたら名も告げずに野菜や卵の差し入れがあつたり。本当に嬉しかつたです。ありがとうございました。

親戚に不幸があり中断しましたが、それから二十日間ぐらひは続けました。いつも明日のことと頭がいっぱいでした。今考えると、恥ずかしいものを持つていつていたのではないかと思ひます。あのまま家にいたら私のほうがおかしくなつていたのではないかと思ひます。一生懸命することがあり、幸ひでした。感謝の心で暮らしております。

皆様に感謝

六甲道で組合員のサークル活動をリード

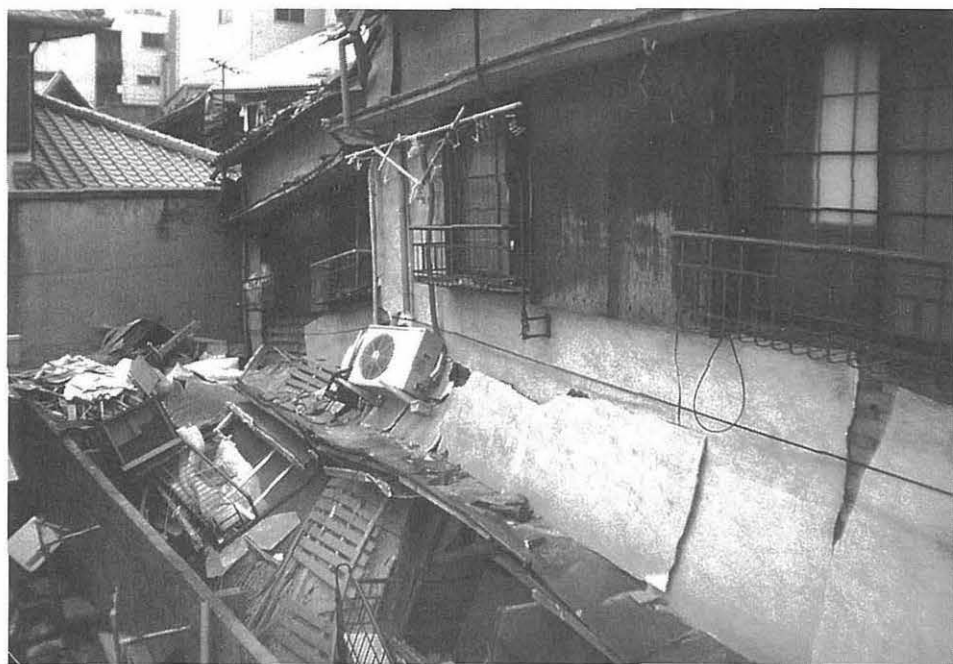
大久保 幸子

あのいまわしい阪神淡路大震災から早十年。あの時は、これから先どうなるのかと、本当に余震の怖さと、不安、心配とで身も心も震え上がって止まらなかったのを忘れることができません。このたびの新潟の方々もどんなにか怖かったことかと、他人ごととは思われません。深くお見舞い申し上げます。

十年前、あの全壊の家より主人と二人、どこも怪我が無かったのが不思議なくらいでした。命があっただけでもありがたく、何もいらないと、連れ出してもらってからとうとう一度も家に入ることができませんでした。

あんなにひどかった神戸の街がこんなに早く復旧、復興し、立ち直れるとは、人間の強い心意気と皆様の勇気に希望と力をいただいて、今日元気に頑張れています。私にとって神より助けられた、おまけの命、人生を少しでも世のためにとボランティアで、楽しみがてら、皆様より助けられて生きております。ありがとうございます。

皆様に感謝。



東灘区／大久保幸子



のむらあきさん (写真左)
おーまきちまきさん (写真右)

あるいて あるいて

あるいて あるいて あなたにつく
坂道 のぼって 風がみえた
約束してた 場所は くずれたまま
通りの 向こうへ ばらまいてる
なじみの 花屋さんと 息が止まる
羽のはえた おじさん どこへ消えた
あるいて あるいて あなたにつく
まわり道 しても 叱らないで

作詞・作曲／おーまきちまき

あるいて あるいて

おーまきちまき

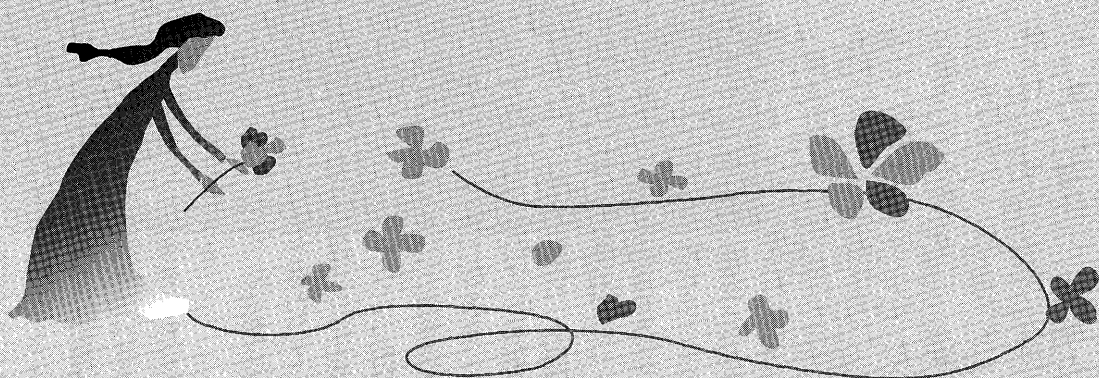
ギターの野村さんとコンピを組んでちょうど十年になります。それまでは別々のバンドで活動していましたが、練習をはじめた矢先に地震に遭い、避難所で歌を聞いてもらったことが初ライブとなりました。その後ずいぶんいろんな場面で歌をうたってきたのだなあと、振り返れば赤くなることも多々あります。

震災当初は、みなさん大変な生活をしておられる中にも生きるパワーを見せつけられ胸が熱くなりました。一方では、たいした被害もつけなかった自分がのんきに「歌なんか」歌っていることに後ろめたさもありました。でもその後ろめたさをくつがえしてもらったことは大きな宝物となっています。

歌や音楽は、それでおなかを満たされるわけでも、目に見えて何かの役に立つわけでもないのです。だけれど心と心のあいだを飛んでゆくことができるんや！心のねっこまでとどくこやー

涙を流しながら「ありがとう」と手をにぎってくれた人のことが忘れられません。今ごろどうしているかしらねばいいかな……。

おもい荷物 しょって 動く人の
波に のまれたら 心止んだ
ゆれる肩が ふれる 声かけあう
かおのくろい おばさん 笑顔もらった
あるいて あるいて あなたにつく
坂道 のぼって 風がみえた
あるいて あるいて あなたにつく
まわり道 しても 叱らないで
あるいて あるいて あなたにつく
次の角 曲がる
きっと 会える



震災と障害者～復興の点検軸は何か～

松村 敏明

僕が神戸へやって来て、障害をもつ人たちと付き合いだして四十年が経つ。かなり多くの障害者たちと付き合い、暮らし、生きてきた。震災の直後の、それらの付き合いできた障害者たちの安否確認から僕たちの取り組みは始まったのだった。

アスファルトのめくれ上がった道路をバイクで走り「よくぞ、本当に生き延びてくれたー」という安否確認と、ライフラインの確保に走り回る半月であった。この半月間に活動したのは小規模作業所・デイサービス事業所・グループホームなどの自主的な活動拠点の仲間たちであった。

二月、交通網の回復と同時に兵庫県下四十三の自主的な地域活動を行っている障害者グループが、障害者自身による救援・復活活動をめざして『被災地障害者センター』を旗揚げした。

全国から駆けつけてくれたボランティアに支えられて活動の範囲が急速に拡大した。僕たちとの付き合いの余りなかった障害者の家庭へも訪問が始まり、最終的には八百五十軒にも及んだ。

「自ら出向く、ニーズを調べる、支援内容を確認める、活動に責任を持つ」という姿勢と共に、「顔の見える関係」「草の根の活動」が大切にされた。

この時期、大震災という自然からの打撃を受けた被災市民はすべて等しく苦難という共通のテーマを持った。障害者にとっては、避難所に入れない、仮設住宅で住めない、情報が届かないなど特別の苦難があったことは確かだが、例えば、鉄道の代替バスを待つ長い長い行列の中で誰しもイライラしているときに、車椅子の青年が言った「ぼくら、震災以前からずっと不便だった。焦らずゆっくり生きていこう」という言葉には、あるいは、ネットワークの支援に支えられて地域への炊き出しを始めた障害者たちが「今こそ地域との絆を創り出すのだ」と言った言葉にも、障害者も共に生きてゆける新しいまちづくりへの期待が込められていたのだった。

しかし、それまでの「防災計画」にも、新たに策定される「復興計画」にも障害者の生活確保が具体的に描

かれることはなく、それゆえに障害者への施策は「一般施策から排除された者への特別施策」として展開される。ある時は地域から排除され、ある時は特別の施策を受けると妬まれる。こうして障害者は社会的に取り残されるのである。

ところが、こうした地震による生活の困難さ、権利を奪われている実態、復興から取り残されている現実をよく見つめると、それらの困難さや実態や現実、震災と直接関係のない日本の何処に住む障害者にも同じように突きつけられている問題であることを知る。つまり、「被災」にだけ着目した救援活動では一人一人の障害者の生活を展望することはできず、社会総体に向き合う活動（それは差別的撤廃に直接つながる）に移行することが求められたのである。

震災直後に活動した自主的な地域活動の拠点（小規模作業所・デイサービス事業所・グループホームなど）は急速にその数を増し、（僕たちは「小学校区に一つの拠点を！」を方針とした）地域で重要な役割を果たし、新しい地域づくりの主人公にな

ろうと努めている。私たちの活動は被災障害者を対象にした「救援・復活ボランティア活動」から「地域での障害者市民活動」へと転換していったのである。

例えば、震災の直前に実現した「全身性介護派遣制度」による身体障害者の生活支援に引き続いて、震災直後からの知的障害者への生活支援の取り組み（家庭から学校や作業所への通学・通所の介助、過度の緊張からくる情緒不安定の解消のために散歩に出るときの付き添いなど）が全国から駆けつけてくれたボランティアによって一挙に拡大し、社会化し、「知的障害者・児童へのガイドヘルプ」の制度の要求と、実現につながったのである。

十年後の今、新潟地震や風水害などがあって震災関連の報道が増えている。障害者については、「災害弱者 所在把握 二割」という見出しで、災害発生時の救助が必要な高齢者や障害者がどこにいるかを自治体の防災部局は把握していないと報じている。間違った報道ではないにしてもあまりにも「被災」にだけ着目

した発想ではないかと思う。そこからは最も大切な視点が抜け落ちるように思えるのだ。それは、この十年の間に私たちが学んできた『平時における「地域生活確保」「地域生活支援」のネットワークこそが重要で不可欠なのだ』ということである。

確かに介護保険や支援費制度によって高齢者や障害者を取り巻く状況が変わったといわれる。しかし、私達は「地域での障害者市民活動」の展開こそ、復興の点検軸としたい。
【まつむらとしあき・社会福祉法人えんぴつの家理事長】



青谷川街園で炊き出し

六甲小での湯沸かしがボランティアのはじまり

小林 るみ子

豊岡の水害に続く新潟での地震。次々と入ってくる情報に、私は十年前を思い出しています。突然襲ってくる余震の恐怖、プライバシーのない体育館での避難所風景、玄関前に積み上げられた段ボール箱の救援物資、行列ができる炊き出しの様子、寒さを凌ぐための焚き火、毛布にくるまった被災者…、増えていく死者の数、当時の事が鮮明に思い出されてきます。十年前の阪神・淡路大震災では、六千五百人に近い死者が出ました。生きているだけでどれだけ有り難かったか、お互いの生存を確かめ合い、あの恐怖を共有した多くの市民がともに生きている事に感謝しました。

私の家は一部損壊でした。服を着たまま、靴を履いたまま、恐怖の一夜を過ごした次の日、私は、避難所になっている六甲小学校に向かいました。その当時、小学校には、教室はもちろん、体育館から廊下まで、三千人近くの人が避難していました。職員室の前に、「何かできることがあれば」と、保護者が一人、二人、三人…と集まってきました。「北庭

に大きな釜があるので湯を沸かしてもらえないか」という小学校の依頼に、さっそく子どもたちが集めてきた廃材で、早朝から夕方まで大きな釜にたぐり湯を沸かし始めました。それが私たちのボランティア活動の始まりでした。

厳寒の一月、あまりの寒さのためにせつかく助かった生命を縮めてしまう人も出てきました。そんな中、

温かい湯で身体を拭いたり、インスタントラーメンや湯たんぽに使ったり…、湯で「暖」を取ることは、心身ともに被災者を温めるものになりました。集い、語り、動くことで震災の恐怖から逃れ、平常心を取り戻せるような気がするのでしょうか、その後も、次々と保護者が集まってくるようになりました。そこで無理なくボランティア活動が続けられるよう輪番制にしました。また、露わになった避難所の問題点や小学校の要望など、行政への働きかけも保護者と繰り返し行ってきました。そして、三月末まで、ささやかなボランティア活動をやり続けることができました。まだまだ多くの課題を残し

つつも、一つの節目を迎え、私たちは、小さくとも充実感、達成感を持つことができました。しかし、「生命があつてよかった」と生命の尊さや人と人との絆の大切さを感じることでできた頃と違い、その頃には、避難所と小学校の共存という困難な状況のもとで、展望の持てない避難所生活は、もう限界を迎えようとしていました。

阪神・淡路大震災は

「ボランティア元年」

阪神・淡路大震災では、九五年の一年間で、延べ百四十万人程のボランティアが活動し、しかもその六割は、十代、二十代の若者だったと言われています。無気力・無感動と言われがちな今の若者たち、彼らの足を被災地に向かわせたものは何か、「放つてはおけない」という気持ちから衝動的に、自発的に行動を起こさせたようにも思います。ボランティアの中には、震災が契機で人生観を大きく変えた人も決して少なくはありませんでした。もちろんボランティア活動のあり方そのものも再考



される機会ともなりました。

震災の折、行政の取り組みは、平等・公平という原則のもとで大変窮屈な対応がなされ、不十分さが目立ちました。その反面、ボランティア活動は、個別的にきめ細かく対応できるところにその良さがありました。一言で言えば、“量”より“質”を保障するところにボランティア活動の意義があったのだと思います。また、

医療生協でのボランティア活動

震災は、一瞬のうちに多くの尊い生命を奪い、私たちの生活基盤をも奪ってしまいました。避難医療生協（当時）も多くの組合員を失い、また診療所も多大な被害を受けました。地震発生後、診療所と六甲道診療所は、電気・水道・電話・ガスが不通のまま、待合室で救急患者を受け入れていましたが、六甲道診療所と岸地通の本部（当時）は、使用禁止になり、移転先を探し回らなければならぬようになりました。その後、六甲道診療所は仮設診療を開始し、

ボランティア活動には、継続性や組織性も求められてきました。このような流れから震災後の一九九八年にNPO法（特定非営利活動促進法）が成立しました。まさに阪神・淡路大震災が、“ボランティア元年”とも呼ばれる所以です。

診療所は医療班で避難所巡回を始めた。そのような状況の中にあつて、比較的被害の少なかった組合員が集まり、ボランティア活動をはじめようになりました。阪急王子公園駅前でのコーヒーマービス（写真）と血圧チェックにはじまり、安否確認と救援物資を届けるための組合員総訪問、JR難駅前でのコーヒーマービスと血圧チェック、デイホーム六甲での毎週の炊き出し、診療所前での豚汁の炊き出し、避難所

の組合員総訪問、青谷街園での健康相談、さらには仮設住宅への訪問活動や健康教室など、医療生協としてできることに精一杯取り組んできました。被災者を支えようと取り組んできたこれらのボランティア活動は、組合員自身の心の支えともなりました。そして、それは被災した医療生協再建に向けての力強いバネともなっていました。

震災の折のボランティア活動を契機に引き継がれてきたものも含め、現在、ろっこう医療生協には、いくつものボランティアグループが活動しています。

診療療園では、食事会、すみれの会、ミシンボランティア、デイケアボランティア、駐輪場ボランティアがあります。六甲道診療園では、食事会、喫茶ムーン、東雲診療園では、デイケアボランティアなどが、組合員の手によって自発的に積極的に取り組まれています。

やがて迎える超高齢社会を前に、今後、ボランティア活動はますます不可欠なものになっていくと思われます。【ろっこう医療生協ボランティア委員会】

人と共に生きていく時代に

灘診療所の応援に駆けつけた

谷口 尚恵

原稿の依頼を受けた時、改めて「あの地震から十年の月日が流れたんだ」と思いました。

私の住む阪南市は大阪湾に面し震度五の揺れで、生まれて初めて地震の恐ろしさを体感しました。

テレビをつけると、神戸の街はさらに大変な事になっていました。

私が以前住んでいた東灘区の高速度路が倒れ、ビルは崩壊、木造住宅も崩れ、火事がいたる所で発生…。

神戸の友人たちは大丈夫だろうか？と電話をかけてもつながらない日が続きました。

夜になると対岸の六甲の麓の神戸は、いつもはきらきらと夜景の美しい街なのに、その日は一面暗闇で一部赤々と見えたのはたぶん長田一帯の火事の現場だったと思います。

二三日してやっと灘診療所に勤務していた谷口美保子さんと連絡がとれ、一月二十四～二十五日、夫とリュックに生野菜やおでんなどの食料を詰め、神戸へ向かいました。電車は西宮北口までで、そこからバスに乗り換ええました。バス停は長蛇の列（写真）、きつと安否を気遣う人

達・ボランティアの人達だったのでしよう。

灘診療所に着くと、スタッフの人はてきぱきと働き、私は主に問診の手伝いで患者さんの話を聞きました。水もなく、ガレキのほこりでアトピーが悪化した患者さんに、持ってきた生野菜を少し渡すとても喜んでいただきました。店頭から食料品が消え、その時は生野菜もとても貴重だったのです。

水も出ない診療所では紙皿をティッシュペーパーで拭きながら何回も大切に使っていました。それでも診療所はまだ物資が恵まれていたそうです。一泊して翌日の夕方、美保子さんと途中のお店で最後の一台の自転車を購入し、甲子園まで帰りました。

脱線して止まっている阪神電車、斜めになり今にも崩れそうなビル、壁が完全にはがれた家には地震の朝まで日常の食事をしたであろう食卓がそのまま残っていたり…。悲しい気持ちになりながら、美保子さんの実家へ到着。暖かい食事とお風呂をお母さんが用意してくださり、改め

て日常の幸せを感じました。

それから、阪南市内の有志でカンパを集めたり、東灘の保育所へ炊き出しに行きました。

小さな女の子が「おいしかったよ あったかいごはんありがとう がんばってください わたしもおかあさんとふたりでがんばります」とおいしそうな中華丼の絵をカレンダーの裏に書き手渡してくれ、それがテレビで放送されたこともありました。

しかし私が神戸の震災に関わったのは結局半年位でした。

今年、四十八才の誕生日の記念にと、ファンだった元フオークルの北山修さんのコンサートに足を運びました。現在精神科医である彼は話の中で、

『人は思いがけない不幸に会うと最初、まさか自分が…と否認し次に、なぜ自分が…と怒りそれから抑うつ状態になり、それを持ち越えると寛容になり、自分のやりたいことを見つけ、人のためにも働きたいと思うようになる』と話していました。今震災から十年がたとうとしてい

ます。

神戸の人達は、悲しみ・苦しみを
少しずつ乗り越え、自分のやりたい
事を新たに見つけ、自分だけのため
ではなく人と共に生きていく時代に
入りつつあるように思えます。

時々遊びに行く神戸の街は空気が
優しくゆったり流れ、人々も穏やか
で大好きな街です。

神戸の震災から数多くの教訓が生
まれ、ボランティア活動も定着して
きました。いつ起こるかわからない
災害や病気など、物心両面で支えあ
える体制―きめ細やかな行政の対応
と、『一人は万人のために、万人は
一人のために』という生協の活動が
ますます必要な時代を迎えていると
思います。



阪南市／谷口尚恵

被災者が世論を動かし、国会を動かした

被災労働者ユニオンを結成し、「公的援助法」実現のために活動

黒崎 隆雄

阪神大震災は日本の諸矛盾を露わにしたが、作家の小田実さんは「この国は経済大国であっても、『人間の国』ではない」と言った。この国が地震、台風、火山爆発など自然災害多発の国であるにもかかわらず、災害被災者の生活基盤の再建を支援するシステムがなかったからだ。

そのため、世帯数が少なく義捐金を中心に生活再建が可能だった奥尻・雲仙普賢岳と違い、被災世帯が桁違いだった阪神大震災被災者の生活再建は困難を極めた。震災一年後の状況は、震災失業者の一人が再就職できておらず、仮設住宅になお三万八千世帯、孤独死は百人を超えていた。こうしたなかで、「個人補償はない」「自助努力を求める」政府に対し、小田実さんが「公的支援法」、被災市民自らの手による市民議員立法づくりを呼びかけた。

私たちは震災の翌年から、仮設住宅を訪問しての被災者労働調査をはじめたが、一年後の状況は、八十四%の人が仮設住宅から恒久住宅に移れるメドが立っていなかった。そして、「家がないから仕事に就けず」、

「仕事がないから家が借りられない」悪循環が生まれていた。

震災直後に広がった助け合い、励まし合いの姿が月日とともに薄れていくなかで、私たちは「取り戻そう『住まい』と『仕事』」を掲げ、働く者・市民の新たな地域での連帯を創り出したいと被災地メーデーをはじめた。須磨区大公園での第二回メーデーでは五m余りの鯉のぼりを用意し、被災者・被災地の思いを鯉の鱗1枚1枚に書いてもらった。三月に「住専より被災者支援を」と五万人の署名を持って国会キャラバンに取り組んだが、十九日からのキャラバンで鯉のぼりを国会に届けた。

翌二十日、超党派三十九人の議員が賛同し、市民議員立法「災害被災者等支援法案」が参議院に上程された。その集会で法案実現を求める署名運動を提起し、再び取り組みをはじめた。

三十一日に「公的援助法」実現署名実行委員会」を結成し、翌日から毎日昼休みに元町・大丸前で署名活動に取り組んだ。十日からの三回目となる国会行動には、神戸の花・

紫陽花の花びらに声を集めて参加した。一部新聞では法案は「廃案」になると報道した。これまでの常識では、与党提案が「継続審議」になることがあっても、それ以外は審議もされない「ふるし」にされ、「廃案」にされてきたからだ。

しかし、十八日、参議院は「継続審議」を決め、被災者の願いはつながった。いよいよ本腰を入れて署名を広げようと、地域での実行委員会づくりを呼びかけ、目標を神戸で二十五万、兵庫県で五十万、全国で百万人とした。七月九日の中央区での結成を皮切りに、神戸市内八区、尼崎・西宮・芦屋・明石の十二地区、そして青年による実行委員会も結成された。八月には、岡山県山陽団地（当初三百五十戸が避難し当時百四十戸ほど）を訪ねたが、長田区で被災した八十三歳の方は「請願の趣旨をみんなで検討したが、これは極めて重要な人類史的意義がある」、「これだけの大災害の試練を受け、後世に何の教訓、政策をも残さずに天に還るのは恥ずかしいと思い続けてきた。」と私たちを勇気づけてくれた。

各地区実は、仮設住宅や街頭で署名を集め、神戸市内のほぼすべての労働組合、そして全国の労働組合などにも郵送で呼びかけ、明石では自治会も参加するなど六十万人の署名を集めた。私たちの呼びかけにこれだけの人が賛同してくれたことに感謝したが、被災地との「温度差」、私たちの運動の狭さ、「草の根」からネットワークを広げることの難しさも感じた。

九十八年五月、ついに「公的支援」を拒否し続けてきた政府サイドを動かす、「被災者生活再建支援法」が制定された。しかし、この法律は、私たちが求めてきたものとは年齢・所得制限や金額の不十分さなど似て非なるものとも言えたが、被災者に公的資金が支給されることになった。この法律は、さまざまな立場からの各種の取り組みの総和によって実現したに違いないが、高齢にもかかわらず何度も夜行バスで国会に行き、議員の部屋をまわり、国会前に座り込んで訴えた被災者を中心としたみなさんが世論を動かし、国会を動かしたのだと私たちは思った。震災か

ら十年、当時行動をともした何人かは他界されたが、首都東京のご真ん中、日比谷公園にテントを張った阪神被災者の行動は、この国を少し「人間の国」にしたのかもしれない。

この法律はその後の災害とともに、台風などの自然災害への適用、支援金の増額など改正され、今年相次いだ台風、新潟中越地震被災者にも適用されることになった。しかし、アメリカが戦争するための軍事支援に多額の費用を支出し、日本を「戦争する国」にするための有政法制が次々に整備されるのに対し、大震災が予想され、自然災害が続くこの国の市民の「有事」に対して国が責任を持つ制度はまだできていない。



東灘区／山口琴代

♪ ラブ・パラシュート ♪

加納浩美



阪神大震災から、まる十年ですね。

- 1、地震の揺れを感じた瞬間、妙に気持ちが引きしまる。
- 2、テレビの地震速報にはものすごく敏感。
- 3、内外問わず、被災地のニュースに釘付けになってしまふ。
- 4、一月二十七日という日に特別な思いがある。

ラブ・パラシュート

作詞／天川 彩
作曲／加納浩美

突然の悲しみに 私心は迷子となって
青い空まで見えなかった
明日という日の意味さえも
忘れかけようとしていた日々
そんな時 あなたは遠いまちから祈ってくれた
ラブ・パラシュートにのせて
絶望が希望にかわるということ
涙を全部流したら 虹にかわるということ
今私から ラブ・パラシュート
きくと誰かに ラブ・パラシュート
届け 届け ラブ・パラシュート
あなたが届けてくれたから



これらが、私が震災前に持っていなかった被災者を代表するような感覚です。もうひとつ、揺れていないのに揺れているみたいな感じもしばらくありました。その事を人に話しているうちに消えてなくなっていました。

私は灘区六甲町で被災しました。地震からまもなく、近くで火災が発生しました。すぐに救急車が来ると思いましたが、来ませんでした。ベランダには火の粉が降りしきっていました。どうにか火事を逃れたその家に今も住むことができます。(感謝)

呆然と佇んでは、呆然とあてもなく歩き続けたあの日。自分の家族と近所の友だちのことで精一杯だったあの日。私は一七日の夜ですが、摩耶小学校に避難しました。翌一八日の早朝からおにぎりや毛布が配られていたの思い出します。いったい誰が届けてくれたのだろうか？ すごいな、ありがたいなと思いました。

あれから十年。我が家の周りはなんと十年間ずっと工事中。まだまだ変わっていくのでしょうね。時が過ぎてても、町が変わっても、震災の時に強く感じた「人が人を助ける思い」を、生涯忘れないでしょう。

何もかも失くして すべてのが色あせたようで
私の道まで途切れて見えた

朝陽が昇る時さえも

ひざをかかえてうつ向いてた

そんな時 あなたは遠いまちから祈ってくれた

ラブ・パラシュートにのせて

いつだってひとりぼっちじゃないだと

孤独な夜にさようなら みんなが君を愛してる

今私から ラブ・パラシュート

きつと誰かに ラブ・パラシュート

届け 届け ラブ・パラシュート

あなたが届けてくれたから



「震災10年」は何を問いかけるか？

中田 作成

阪神大震災は、文字通り「驚天動地」の災害であったが、その直後の神戸市長の発言もそれに劣らぬ「驚天動地」であった。

「空港計画は予定どおり手続きに入りたい。壊滅した経済機能の回復のため、必要だと思つ」、「市民に希望の星を与える必要がある。前倒しするぐらいのつもりで進める」（九五五年二月 朝日／サンケイ新聞）

震災によってライフラインを絶たれ生死の境にあった住民たちは、なによりも生活再建が優先され、神戸空港計画などは撤回か、少なくとも凍結されるものと思ひ込んでいた。ほとんどの神戸市民は、この市長発言に「まさか？」と耳を疑った。

しかし、九九年九月空港は強行着工され、震災から十年の今、すでに工事進捗率八十%に至っている（二〇〇六年二月開港予定）。だが、もう既成事実だからと決め付けてしまふには、神戸空港問題はあまりに多くの課題が山積している。積み残され、先送りになっている諸課題を今後ともしっかりと市民の目で検証して

いく必要がある。

山積する未解決課題

九〇年に基本計画が発表された神戸空港計画は、当初から、次のような多岐にわたる未解明課題が山積していることが指摘され、建設に疑問を持つ人が少なくなかった。これらの課題の厳密な検証の継続が不可欠である。

- ① 関西国際空港（関空）、大阪空港（伊丹）に加えて神戸空港の必要性・需要見通しなど、関西圏三空港のあり方
- ② 事業費三千四百四十億円の財源調達・償還などの財政見通し
- ③ 閉鎖性海域の埋立による海流への影響・航空騒音などの環境問題
- ④ 神戸港に近接することによる船舶海上交通への影響
- ⑤ 三空港の飛行コースの輻輳による航空安全（空域管制）問題
- ⑥ 神戸空港予定地の海底活断層などの防災問題

空港訴訟判決の示すもの

二〇〇四年三月三〇日に出された

判決は、原告住民の請求を棄却したもの、これらの課題に対して注目すべき指摘を行なっている。

- ① 「空港島の土地処分代金で調達予定の事業費は当初の予定通り調達するのが不可能になっており、市財政に悪影響を与える可能性がある」
- ② 「将来、需要予測が外れ、収支自体が成り立たなくなるおそれがある」
- ③ 「関西圏にさらに神戸空港を建設する必要があるといえるか疑問なしとしない」
- ④ 「安全性に問題がないとはいえず、殊に他空港の飛行経路との競合による危険性については、原告らの主張にも一理があるといわざるを得ない」…

この判決は実質的に、空港問題に決着がついたのではないことを示したものである（原告住民側は、大阪高裁に控訴）。

空港問題が問い直す神戸市のあり方神戸空港をめぐるこれまでの経緯は、まさに神戸市の都市政策のみならず民主主義・住民自治のあり方を

も明示するものであると同時に、将来への方向を問う直す重要な課題でもある。

とりわけ、九八年の空港住民投票を求める直接請求が三十万人署名をも集めながら、議会によって否決されたことは、将来にも大きな禍根を残すことになった。こうした経緯を踏まえて、市議会のあり方をも今一度、厳しく検証し直す必要がある。それは同時に、神戸における行政、議会だけでなく、「市民力」そのものをも問い直す課題であるといえる。

至る所で「震災十年」が叫ばれるが、それは「十年で一区切りついた」ではなく、「十年で見えてきたもの、見えてこないもの」を再検証し、今後問い直すためである。空港問題も例外ではない（今年は市長選挙の年である）。【なかなたりしげ・新しい神戸をつくる市民の会世話人】



特別寄稿

技術者の視点から見た 阪神淡路大震災の教訓

Dr. ロバート ケイヤン
アメリカ カリフォルニア州
地震調査 土木工学技師
元 神戸大学 工学部教授

Dr.ロバート・ケイヤンはアメリカカリフォルニア州に在住の技術者で、震災後の調査で1年間神戸大学に客員教授として来られていました。今回の寄稿は、Dr.ロバートが日本に在住中から懇意になり、その後も親交をお持ちの組合員、荻野俊夫さんのご好意により実現いたしました。「一友人の意見として書いた。自分が書くことで何か助けになれば」ということで快く引き受けていただいたそうです。ご好意に感謝いたします。（編集委員会）

はじめに

一九九五年一月一七日の阪神大震災から十年が過ぎました。都市への大規模な地震の影響を緩和する方法を学んでいる研究者にとって、震災は私たちの地域を地震の危険から守るためには、まだ多くのことが必要であるということを教えてくださいました。

近代的に整備された都市を襲ったこの地震が、六千人を超える死者、十万户以上の全壊、二十一万四千戸以上の半壊、高速道路や鉄道の高架への大きな損害、広大な埋め立て地の液化化および土地崩壊、水道、ガス、下水道および電気などライフラインの破壊をもたらしました。地震の直後では、都市の機能が救助と回復の活動のため、長い間麻痺しました。震災の被害の大きさは、裕福な国の都市でさえ被災した人達が直面した危険を回避するにいたらないということを示しています。

私はなぜそのような恐ろしい被害が生じたか、また、街の損害パターンと土壌との関係について研究を行なうために、土木工学の客員教授として神戸大学に来

ました。カリフォルニアでは、アメリカ地質調査の地震研究者で、ロサンジェルスやシアトル、そのほかの地域の地震被害を評価、被害を抑える方法を研究しています。六甲山系の様な沿岸の山並み、大阪湾の地質、また、神戸エリアの海岸の沖積土および埋立地は、私の故郷、北カリフォルニアのサンフランシスコ湾および南カリフォルニアのロサンジェルスによく似ています。神戸での損害の詳細を学習し、地面および建築物の耐震基準を改善することによって、日本の他の地域で命を救い、経済的な被害を縮小することが出来ます。それはまたサンフランシスコやロサンジェルスを含む世界中の都市でも同様です。

日本およびアメリカの両国は緊密に協力し、地震の研究を共同で進め、また地震に弱い世界の他の地域での設計基準を定めています。そのような過程の中で、神戸大学で田中教授（この人は私が研究を行なうために神戸で一年間滞在することとを可能にした）に出会いました。私の家族は、神戸での滞在をすばらしいものにしてくれた田中教授とそのご家族に、および岡本の隣人との持続する友情に深

く感謝します。

私たちの調査研究は、ねじれ波速度の測定により地面の液化化を特徴づけるようなものを見つけることです。

震災以降の様々な研究から学習された多くの科学的、技術的、社会的な教訓があります。それらは、生命、社会サービス、および財産を救うことにより、私たちすべてに役立つことでしょう。これらの教訓が、恐ろしい事態が起きる危険をへらしてくれることを望んでいます。

技術的な教訓

砂地盤での土壌崩壊と液化化現象

海岸と湾の埋め立てのために使用された真砂土といわれる土の液化化は驚くべきものでした。神戸地震の前には、真砂土の地盤が液化化するとは考えられていませんでした。真砂土は六甲山に多い花崗岩が風化したもので、砂利をたくさん含んでいます。例えば芦屋ロックガーデンが真砂土です。

確かに、大昔の地震の研究をとおして、私たちは、土を含んでいる砂利が液化し

た他の場所があることを知っています。私が神戸大学で教えていた年に、液化化が自然な土壌の中で観察された一九四八年の福井の地震を緊急に研究しました。福井の試験場で液化化の可能性を測定し、九頭竜川の沖積平野に液化化する小石土壌をみつめました。振り返ってみると六十年も前に福井で起こったことは、神戸での真砂土の液化化を警報するものでした。私たちは、現代の都市で起こりうる損害についての学習しました。多くの自然環境の中で、過去の地震被害の記録を遠い過去にわたって研究しなければなりません。地震工学の大部分は経験的なものです。ですから、熟練の技術者はまた技術の歴史家であるに違いありません。

液化化が生じる場合、土地はしばしば移動し流れます。土が移動すると、建物やパイプライン、基礎構造物に大きな力がかかります。埋められた水やガスのタンクのある地域では、タンクが地面から浮かび上がりました。そうした貯蔵タンクは地震の後の出火元となりました。ライフラインへの損害が地震の後に消防力を削ぎ、街の回復を遅らせます。地震の際の土の移動は重要な問題です。ライフ

ラインへの重大な損害の例は東灘の下水処理場への損害でした。この処理場を地震の後に作動させておくために非常に創造的な解決法を用いましたが、すべての施設が回復するには数年かかりました。

港

恐らく、阪神大震災によって引き起こされた最も広範囲な損害は、海岸に沿った、ポートアイランド、六甲アイランドおよび多数の埋め立てられた島に対してのものでした。ここでは、最近に建設された港のコンクリートケーソン壁が液化化した真砂土層から海に数メートル押し出されていました。結局、ひどく破損しましたが、これらの耐震性のケーソン壁は残存しました。しかし、港設備は海の出荷を継続することができませんでした。地震から十年たち港が再建されてから何年もたった現在でさえ、地震の経済的な影響は、まだ感じられます。

鉄筋コンクリートへの損害

神戸地震によって引き起こされた最も劇的な損害は阪神高速道路の高架の倒壊

でした。芦屋市を境界にして、大きな円柱で支えられた鉄筋コンクリート高架が崩壊しました。このような倒壊は先例がなく、一九八〇年以前の耐震基準で設計された高架橋で生じました。しかしながら、現代の高架橋さえ損害を受けました。

私たちは、設計の基準により、構造物は改善しましたが、より厳格な基準が建物の全壊に満たない重大な損害を防ぐためにまだ必要であることを知りました。高速道路のような重大な構造物は地震による崩壊を免れるだけでなく、救助と回復に役立たなければなりません。例えば、新幹線の鉄橋栈橋への損害は、柱の倒壊と橋げたの崩壊でした。もし列車が運転中ならば、脱線していたかもしれません。この十月に、新潟県中越地震中に新幹線は長岡で脱線しました。鉄道の設計を、神戸と長岡での最近の損害、および都市での脱線の可能性を考慮して再評価する必要があります。

技術界への衝撃

震災より以前、技術者や科学者は日本やアメリカの現代的に計画された都市で生命やサービス、財産が地震の損害を受

けるとは思っていませんでした。震災は、日本や他の国々の現代的な構造物が十分に地震に耐えうるように設計され建てられているという神話を破壊しました。震災は、カリフォルニア地震に加えて、耐震性の港、建物および高速道路の設計および災害計画の効力の自惚れを露出しました。

土地や建物が、現在の基準より大きな地震運動の下で耐えて、残存することができるであろうことが、技術界への最も大きな衝撃でした。最近の釧路（一九九四）、神戸（一九九五）および新潟県中越（二〇〇四）地震、最近のサンフェルナンド（一九七二）、ロサンゼルス（一九八九）およびノースリッジ（一九九四）での最近のカリフォルニア地震のように、マグニチュード六・五〜七強の大規模な陸上での地震は一般的で、これらの地震の損害はよそよりもはるかに大きくなりえるということをお願い出させます。日本のエンジニアは神戸で観察された損害によって、重要な建築物や土地の設計の基準をより高いレベルへと採用しました。レベル2の概念はレベル1の震動よりも強い地震に耐えるような建物、高速道路および港を設

この設計概念が損害および生命の損失をへらしたいを望みます。

最後に、技術者は人々のすばらしい勇気、すばらしい気質、および強さによって神戸の街での救助や回復によって勇付けられました。神戸の人々は余震の恐ろしい困難に耐え、彼らの困難な仕事、創意および忍耐は、私たちの恐ろしい安全な都市を与えました。

個人的に、私の家族および私は神戸の隣人や友達の親切、思慮深さおよび品位の短い滞在は、私たちが残りの人生を素晴らしいものにしてくれるでしょう。私たちは常に優しい記憶と神戸への希望を胸のうちに抱いています。

(訳／編集委員会)

Remembering the Lessons Learned from the Kobe Earthquake: An Engineering Perspective
Dr. Robert Kayen

Research Civil Engineer
United States Geological Survey
Menlo Park, CA

And formerly,
Visiting Professor of Civil Engineering,
Kobe University
Nado-Ku, Kobe, Japan

INTRODUCTION

Ten years have passed since the disastrous Hyogo-Nambu (Kobe) earthquake of January 17, 1995. For engineers studying ways to mitigate the effects of large earthquakes on urban centers, the Kobe earthquake was a shocking message that much work still needs to be done to make our communities safer from the dangers of earthquakes. This earthquake, striking a modern and seemingly well designed and prepared city, resulted in more than 6,000 deaths; over 100,000 total collapses of structures; over 214,000 partial structural collapses; severe damage to highway and railway bridges; liquefaction and ground failure over an extensive area of reclaimed coastal land including the largest modern marine container port in Japan; and destruction of the city's networks of water, gas, sewer, and electricity pipelines. In the aftermath of the earthquake, basic city and utility functions were paralyzed for a long time dramatically affecting rescue and recovery operations. The extent of the damage from Kobe shows us that even modern cities within wealthy nations still have far to go to reduce the hazards faced by it's people.

With my family, I came to Kobe University as a Visiting Professor of Civil Engineering after the earthquake in order to conduct research to learn more about why such terrible losses occurred at Kobe, and what was the role of the various soil types within the City on the damage pattern. In California, U.S.A., I am part of a team of earthquake research scientists at the United States Geological Survey who study ways of estimating and mitigating the damaging effects of earthquakes in San Francisco, Los Angeles, Seattle, and other areas of earthquakes. In many ways, the coastal mountain setting of the Rokko Mountains, the geology of Osaka-bay, and the coastal alluvial soils and reclaimed land of the Kobe area are strikingly similar to my home cities, the San Francisco Bay area of Northern California and Los Angeles area of Southern California. By learning the details of the damage patterns at Kobe and improving the probability that the ground and structures will resist the heavy earthquakes stresses, it is possible to save lives and reduce the economic losses in other areas of Japan, and also around the world in similar urban settings, including San Francisco and Los Angeles.

Both Japan and the U.S.A. collaborate closely and share our roles in advancing the state of practice of earthquake engineering for our countries, and also set the standard of practice in earthquake design for other areas of the world that are vulnerable to earthquake hazards. It was through the many Japan-U.S.A. collaboration efforts that I met our exceptional host Professor Dr. Yasuo TANAKA at Kobe University, who made it possible for me to come and live for one year in Kobe in order to conduct our research. We are deeply grateful to Professor TANAKA who with his family, made our stay in Kobe a deeply rewarding time, and to

震災直後の朝鮮学校

「朝鮮学校を支える女たちの会」でオモニと連帯

山村 ちずえ

あの日、神戸市中央区の東端、灘区との境にある神戸朝鮮初中級学校にも多くの日本人が避難をしました。朝鮮学校は、寒さと恐怖に震えていた日本人を快く迎え入れてくれました。温かいトックをいただき、暖かい通学バスで休ませてもらい、たくさんさんの救援物資に助けられました。中央区と灘区の境にあるという学校というだけで、長い間それ以上の交流もないままにきた学校、神戸朝鮮初中級学校の存在をあらためて知ったのは、この震災が契機でした。激震から四ヶ月経った五月、オモニ（母）会と、日本の女性たちとの交流会を、全壊した神戸朝鮮初中級学校の仮設校舎で行いました。

家を失い、職場を失い、そして学校まで失った在日朝鮮人の皆さんは、筆舌につくせないほどの苦境に立たされていたのです。それは、朝鮮学校は各種学校扱いで、日本政府、文部省（当時）は私学並みの扱いをしていません。したがって学校の建設から運営、教育費はすべて保護者負担になっていたのです。家と職も失い、学校まで失うのではないか、学校の再建はできるのだろうかとの不安に親たちは悩んでいました。あの震災でお世話になった私たちは、「私たちの手で何かお返しができる女たちの会」と考え、「朝鮮学校を支えないか」と考え、「朝鮮学校を支える女たちの会」を結成しました。九月から毎月第一土曜日に、大丸前、元町商店街入り口で、朝鮮学校支援の街頭行動をはじめました。二年間二十四回街頭で市民に訴え、集まった署名八千人。カンパ金四十万円。このことが全国に知られ、仲間たちからのカンパも届きました。「支える会」では、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）のオモニたちが、心を込めて手作りしてくれた、〈おじいさん、おばあさん人形〉や、手編みのシヨールなどの販売も行いました。その利益金も含め、約一千万円の支援金を朝鮮学校に届けることが出来ました。

また、八千人の署名をもって、国、県、神戸市に向けて、朝鮮学校をはじめ、外国人学校に対しての支援要請も行いました。同時期に兵庫県では、「外国人学校協議会」が発足して、被災した学校をはじめ、外国人学校に対する支援を行うようになりました。神戸市には外国人学校が九校あり、生徒数は二〇〇〇年四月現在で約二千六百三十名です。私たちは、今も子供たちが平等に教育を受ける権利を主張し、政府に対し教育基本法的一条校に準ずる扱いをするように、私学並みの予算をつけるように、運動を続けています。あれから十年。あの時のオモニはOBとなり、あの時の連帯感を味わったオモニはもう朝鮮学校にはいません。私たち「朝鮮学校を支える女たちの会」は、一つの節目を経て、『民族教育を支える兵庫女性の会』という名前に改めました。今だからこそ力を発揮しなければならない時期に、私たちは、朝鮮学校を、子どもたちやオモニを十分に支えることができいていません。しかし、十年前に結ばれた“絆”を大切に、今後も民族教育を支えるために微力ながら関わっていききたいと思っています。

そして 豊岡へ 新潟へ



行政もボランティアも継続的な支援が大切

門永直

十月二十七日に台風二十三号の水害にあった豊岡市の災害救援活動ボランティアに参加しました。行動母体は神戸市社協とコープこうべでしたが、兵協連からの要請もあり、ろっこう医療生協からの代表派遣という形での参加をさせていただきました。子供のころから但馬地方にはなにかと縁があつて行くことも多く、豊岡は前年の医療生協のバスツアーでも訪れていたこともあり、被害の報道をみるたびに何かできることはないかなと感じていたので、個人的にはちょうどいいタイミングでこのボランティアの要請を受けることができました。

当日は朝七時過ぎに三宮に集合しバスで豊岡に向かいました。円山川沿いに市内に入っていく車窓からは被害を実感することはできなかったのですが、後で大きくその感覚が被災の実態と違っていることに気づくことになりました。

到着後は現地のボランティアセンターで派遣先のお宅の地図を受け取ってスコ

ップとバケツ、雑巾などをもって現地まで歩いて向かいました。伺ったお宅はちょうど決壊した堤防のすぐそばの梶原地区という地域でした。この梶原地区が豊岡市内で最も被害の大きかった地域で、一階はほぼすべて浸水した家屋がほとんどでしたので、町中がほこりと泥のおいでいっぱいでした。泥をかぶった畳や家財道具が家の前に積み上げられていて被害の大きさを物語っていました。伺ったお宅では前日までに家財道具の運び出しは済んだとのこと、床下の泥を掻きだす作業をお手伝いすることになりました。水が引いたのが台風から二日後だったそうですが、水と一緒にはいって来た泥が床下にかなりたまっていて、スコップで泥を掻きだして土嚢袋につめて運び出すという作業の繰り返しでした。スコップで泥を掻きだす作業は常に中腰なうえに、泥でいっぱいになった土嚢袋はかなり重く、普段デスクワークばかりの運動不足の体にはかなりキツイ作業でした。

何とか四時間ほどで作業を完了して床下の片付けは終わることができました。

作業に入った日が被災からちょうど一週間でしたが、これからまだまだやらなければいけないことが残っているなあと感じての作業終了となりました。伺ったお宅はまだ現役世代のお宅でしたが、これが高齢世帯や独居世帯ならもっと大変だと思えます。被災地全体をみてまわったりすることはできませんでしたが、そういった立場の弱い人に的確に行政やボランティアの援助ができていくかは分かりませんでした。援助がとどいていなければ、大変困難な作業をそういった人たちが自力でしなければならない状況がうまれてしまっているのではという気がしました。住居の復旧はできても生活の基盤となる仕事の再建がきびしい状況にあるようでしたので、被災した方が生活を再建できるような支援を行政もボランティアも継続的に行っていくことがとても重要ではないかなと思いつきながら帰途につきました。

熱い思いをトラックに積んで

岡本 秀美

新潟で震度六強の地震発生、その第一報をテレビで見て私は大きな衝撃を受けました。新潟は、十数年前家族で二年間住んで、楽しい思い出がいっぱいある私たちの第二の故郷なのです。幸い友人達は無事でしたが、何かしなくては、という思いに駆られました。

私ひとりでは何もできませんでしたが、ろっこう医療生協の皆さんのおかげで、救援物資がどんどん集まり、私は皆さんの熱い思いをひしひしと感じました。その熱い思いをトラックいっぱい積んで、大勢の仲間に見送られ、私たち夫婦と職員二名で長岡に出発しました。

途中大雨に遭いながらも、十時間何とか長岡に到着しました。災害対策本部になっている市役所の周辺は、大きな被害もないように見えました。そこで、物資をすべて下ろして、その後ながおか医療生協かんだ診療所に向かいました。

かんだ診療所では、早朝にもかかわらず、全国から支援にきた大勢の医療生協

の仲間が、活動していました。私たちも、早速組合員さんの家の地図をもらい、「地域を周り、困っていること、手助けしてほしいこと、組合員さん以外でも構いません、その場でできることはすぐにしてあげて、できないことは記録してきてください。」と言われました。

私たちは、四人でいくつかの集落を回りました。市街地は、ほとんど被害がなかったのに対し、山に近くなるほど被害が大きいように見えました。神戸のように完全に倒壊した建物はあまりないようでしたが、家の中を見せってもらうと、かなり傾いていて危険な家もありました。

「余震が怖いので、夜は家族五人ガレージで寝ている。」と話してくれたおばあちゃんは、脚が不自由で避難所に行ってもトイレが心配で、すぐ帰ってきたようでした。

またある家は、おばあちゃんがひとりで、家の周りを片付けていて、私たちは石運びを手伝いました。「地震のときは

娘のところに行っていて、道路が寸断されていて、帰って来られなく、やっと遠回りで帰ってきた。家が心配でたまんなかった。」と話してくれました。家の中は、床が傾き、戸は閉まらず、ひとりで住むのは危険なように思いましたが、気丈にもひとりで頑張っていました。避難所にも行かないで、こうして耐えている人が大勢おられると思います。

皆さん一様に、ながおか医療生協の名前を出し、私たちが神戸から来たという、心を開いて話してくれました。わずか一日半の活動しかできず、後ろ髪を引かれるような思いで帰ってきました。これから寒くなり、被災者にはますます厳しい状況になります。今後も地道な支援が必要だと思います。

今回の支援活動を通して、私は、あらためて医療生協活動の原点を見たように思います。地域に信頼され、地域の連帯の中心になる。そのことがいかに大切なことか。ろっこう医療生協も地震で大きな被害を受けましたが、十年経ち驚くような発展をしました。私も理事として、今後はさらに、地域に深い関わりを持ちながら、活動を続けていきたいと思えます。



▲被災した豊岡市内の様子 (写真／兵庫県生協連)



▲床下の泥をかきだすボランティア
(写真／兵庫県生協連)

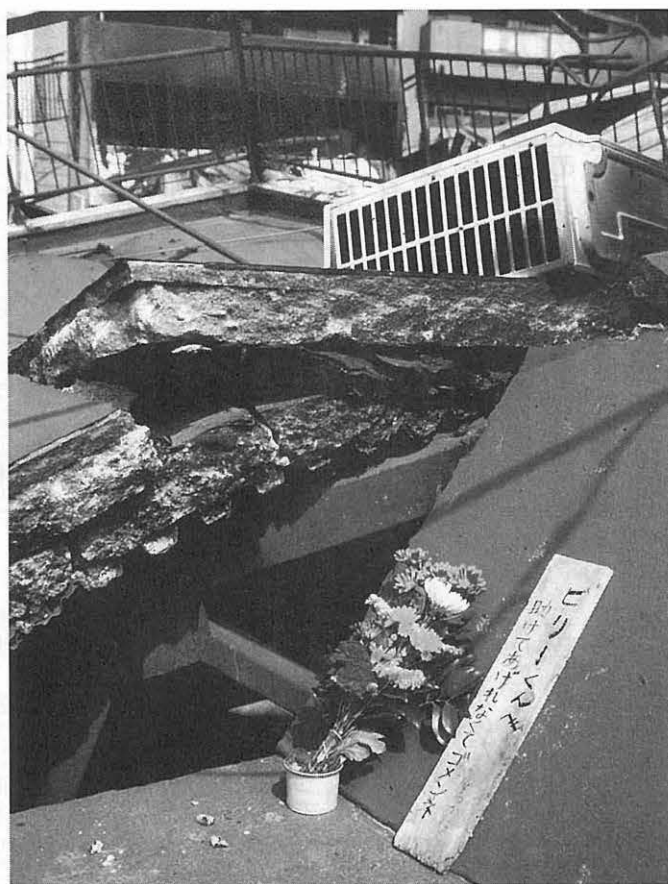


▲崩れた石垣の石を取り除くボランティア



▲長岡市役所ホールに積み上げられた
150箱の支援物資

資 料



エリーくんも大変だったね
灘区／大久保茂春



震災後、月刊労働組合に掲載された鳴海理事長の文章です。

阪神大震災から(1)

月刊労働組合

一九九六年二月号

壊れた家、壊れぬ家

未曾有の大地震から一年がたち、むしろこれからが大変だという思いを強くしています。

当時の報道がらすれば、神戸全域が等しく被災したかのような印象を持った方も多いと思いますが、事実はそうではありません。一番死亡者の多かった東灘区について見てみると、山に近い所に住んでいた人たちの被害は割と軽くて、浜の方へ下っていくにつれてそれは大きくなっていくという違いがあります。

神戸は浜側から順に阪神、JR、阪急と三本の電車が東西に走っており、その乗客はその電車が通っている地域の住民の階層を反映していると言われるように、阪神が庶民、阪急が上流、JRがその中

間とされています。つまり、山側に行く程暮らしむきが良いし、事実高級そうな家や邸宅が多くなります。

震災から間もないある日、東灘区の閑静な住宅街を歩いてみましたが、ほとんど地震の爪跡が見られない静かな従来と変わらないたたずまいでした。山側は被災が割と軽く、浜の方へ下るにつれて災害の程度も死亡者も多かったということは、こんな天災に際しても金持ちは大丈夫、貧しい者ほどひどい目に遭ったと言っても、傾向としては間違っていないと私は思います。

いや、それは今回の活断層がたまたま浜側からJR辺りまでのところを横切っていたから、そう見えるような結果になったのだという論議があるかもしれません。しかし、この活断層が走り抜けている地域にあっても、事実は同じであります。多くの家屋がこの地域では倒れませんでした。単に古い木造のみが倒れたのではない。鉄筋の建物、マンションも傾いたり、一階あるいは四階部分がペシャンコにつぶれたりしました。古いものだけではなく、比較的新しいもの、築後二〜三年から四〜五年のものでも大きなヒビが入ったり、ガラスが割れたりもしていま

す。そういったなかであって、無キズで建っているマンションや木造家屋もあるのです。その違いは、十分に金をかけることが出来たか、手抜きのない仕事による建物だったかということだろうと思います。私が以前住んでいた東灘区のある地域は、道路に亀裂が入り、盛り上がりたりして、まさに活断層を地震が走り抜けたような所です。古い木造二階建ての住宅はつぶれ、狭い道をはさんだ向い側の建て売り住宅群も再起不能なまでに傾き倒れていました。

その中であって一軒だけ少々のヒビ割れだけで保っている家がありました。聞くとところによると、家の都合で一階部分に間仕切りを入れるために支柱を一本つけ加えたのだそうです。こうしてみると、これだけの地震でかつ活断層直下にあっても被害をまぬがれる家は、今の建築技術で十分建てる事ができるということ、を、この例はたまたまに示していると言えるそうです。そして今のこの国では、それだけの技術に裏づけられたような家を持てる人は限られていることもまた現実であって、実際、地価の高い阪神間にあって自前で土地を購入し、メーカーの注文建築を建てられるのはどんな人間か

ということであります。それには手が出ないまでもせめて一戸建てをと、やっと手に入れた家が手抜き安普請、十年やそこらでローンをかかえて倒壊。これが先に述べた建て売り一戸建て群の実態ではないでしょうか。

「人災」としての大地震

ところで、多くの死者を出した、古い木造家屋や木造文化住宅にはどんな人たちが住んでいたか。老人、学生、低所得者層です（と言い切っても傾向としては間違っていないでしょう）。学生についていえば、神戸大生が三十九人、甲南大生が十七人亡くなりました。住むところは自分持ち、公共の住宅は殆んど作らないという政策にあつては、裕福でない学生や老人世帯は、古くても安い「文化住宅」に入るしかないじゃないですか。

文化都市神戸の百万ドルの夜景の間の部分に、かくも多くの古い、地震災害に弱い建物がかかえこんでいたということがあります。そしてそのことが一瞬にして多くの庄死者を出した大きな原因であります。

そして地震直後には何とか一命をとりとめて避難した人たちの中かち、肺炎や

脳卒中を起して亡くなる方が出ました。その多くは高齢者です。老人ホーム等の福祉施設が市街地にもっとあれば、かなりの人たちが死なずに済んだのではないかと言われています。

その意味では、無策あるいはやるべき施策を軽視してきたツケが、六千人ともいわれる死者を出してしまったと言えるのであり、かなりの部分は人災であるといわねばなりません。

地震から一カ月経った頃、私は世話になった人への手紙に次のように書きました。

「家屋がつぶれて避難している人たちは、三二日を経て状況は何ら変わっていない。それどころか疲労・ストレス等感情論的には今後ますますつらくなってくると思います。すでに報道のあり様も大震災直後の二週間とはずいぶんニュース全体の中での比重が違ってきています。復旧がすすみ、店もけなげに開き始め、活気を取りもどしつつある神戸などというニュースにまどわされてはいけません。避難所生活を余儀なくされた人たちの最後の一人が、ともかくも住める場所に移るまでは、この大災害の第一段階は済んだことにはならないのですから。見

るべきことは街の雰囲気ではなく、人がどうなったかということなのです。」

そして今、神戸の街からは震災直後の悲惨な雰囲気はほぼ消失しています。ライフラインも交通網も元に復旧しており、相対的に被害の軽かった人々は、まずは震災前と同様の生活を営んでいると言ってもよい。一方で、それまで住んでいた地域から遠く離れた仮設住宅に移った人たちにとっては、事態はほとんど進展していない。しかも、これらの被害のひどかった人たちは神戸市民全体の比率からすれば約三割で（それだけでもいるということ自体が実は大変なことなのですが）いわば少数派になるわけです。この双方の落差をうめながら、復旧にむけてきちんと見るべきものを見、言うべきことを言っていくのが、私たち神戸市民一人ひとりの責任でもあります。つまりこの民主主義の問題（民主度とでも言いましか）だと思えます。

阪神大震災は終わっていない

去年の秋、医療費免除の延長を求める署名活動を私たちの医療生協で取り組みました。これは、国民保険の加入者で震災で自宅が全半壊（焼）したり、世帯主

が死亡した人を対象として、医療費のうちの本人負担分の三割を免除とするものです。「うちは社会保険だから（関係ない）」というものや、「いつまでも甘えている訳にいかない」という考えに出会ったりもして、どうも意識としては見事に分断されているように感じました。

私たちは集めた署名を兵庫県出身の岡崎ひろみ議員を通して厚生省へ持っていました。県医師会や保険医協会も延長の要望を出してきましたが、長崎県島原市では今も免除措置が継続されているのに、なぜ神戸市では十二月で打ち切りなのかという問いに、厚生省は「今も噴火災害が続いている点で、震災の被害と違う」という立場のようで、人がどうなっているかという視点が全く見られない。一年以上経った今でも群発地震が絶えず起こっていないと駄目だと言っている訳で、こんなことを言う奴は引きずり出して、袋だたきにしてしまえと言いたい。

主権在民、基本的人権の尊重という憲法の精神にもとづいて、人の暮らしを大事にし、保障していくことが、国や自治体の施策の重要な課題であるという認識が、今こそ必要とされています。その意味で、神戸のこれからというのは、この

国の民主主義が試されていると言えます。阪神大震災はまだ終わっていない、全国の心ある人たちとの連帯と支援を求めながら動いている、現在進行形の問題なのです。

阪神大震災から(2)

月刊労働組合

一九九六年三月号

激震地の診療所で

私のいる診療所は激震地だった灘区にあります。診療所の入っているビルは何とか建っていました、中は惨憺たるものでした。裏口は洗濯機、カルテの棚が倒れて全く中に入れない。表玄関を開けてなんとか診療所の中に入ると、四千人分のカルテがラックごと倒れてトランプをまぜたようになっており、天井から水が降り注いでいる。薬もフチャグチャに散乱し、診療室も将棋倒し。

そんな状態の診療所にケガをした近所の人々が次々とやってきました。水もガスも電気もないなか、とりあえず待合室で

傷の処置を開始。そこにしか診療できる場所がなかったのですが、開放性の傷を縫うためのハリも糸もすぐになくなってしまいました。薬については、急場しのぎの一日二日分だけを渡すようにしました。補充がいつ可能になるか全くわからなかったからです。

外来が一段落した午後からは、カルテと薬の整理や、処置をするためのスペースを作ったりしながら、ポツポツと来る患者の対応をして第一日目が終わりました。

この日、ともかくも診療所に来れたスタッフは二十五人中五人、（医師二人、看護師一人、事務一人）という状態でした。当然のことながら、診療所も職員も様々な程度に被災したなかでの活動開始だったのです。

当時の状況を、診療所の村上医師の手記から引用してみます。

「震災当日から二〜三日は怪我の消毒と縫合、骨折の処置が主な診療でしたが、寒さと不衛生からインフルエンザをはじめとする呼吸器感染症が増え、下痢も加わって消耗や脱水から倒れる人が見られるようになりました。特に糖尿病や高血

庄などの基礎疾患がある人や高齢者は、冷たい体育館の床に二三日寝泊まりするだけで肺炎や脳梗塞になり、入院する人が続出しました。高血圧の患者では、薬を持たずに避難しており、寒さと緊張で血圧が異常に上昇する人が続出しました。めったに見ることがなかった脳出血の患者を立て続けに病院に送ったのが印象的です。受け入れ側の病院も水と電気がない状態で、手術が必要な場合の入院先を探して送り届けるのに苦労しました。当初は交通事情が最悪で、救急車は来てくれず、ライトバンに戸板に乗せて運び込み病院まで連れていっても、そこでは受け入れが無理で、さらに大学病院まで送ったこともありました。

災害時の医療体制の確立を

震災後の初期医療についてみると、全壊などで避難を余儀なくされた人をのぞいて多くの開業医は、被害を受けながらも出来る限りの患者対応をしたと思います。そして、地域の人達も、まずはかかりつけの医師あるいは最寄りの病院へと怪我人や病氣の人を運んだのです。救急車をあてに出来ず、また呼ぶ手立てもないなか、家族と共に歩いて、あるい

は戸板で、自動車で病院に運ばれたのです。

神戸には全国でも有数の設備と規模を誇る市立中央市民病院が、ポートアイランドという人工島の中にあります。これが震災後は橋が壊れて孤立してしまい、医療機関としては全く役に立ちませんでした。

つまり、震災後の初期医療をとにかくも支えるにあたって、自らも被災したなかでありつたけの手立てをつくした地域の医師達や中小病院の占める比重がとても大きかったと言えます。このことは、今後災害時の医療体制のあり方を考える時、十分注目されるべきだと思います。

道路・交通網を整備して中核病院の機能を最大限活用できるようにすることも大事ですが、難区、中央区といった単位で地域に密着して医療活動をしている診療所や病院の役割も評価し、緊急の際の情報の把握と必要な援助ができるようにしてゆくことも同じくらい重要であると考えます。

在宅患者の追跡調査から

ところで私たちの診療所では、往診していた在宅の患者さんが三十一人いまし

た。それらの人達が震災後どのようなだったか、まず安否確認に回ることから始めました。在宅医療を担ってきた小西医師の記録から引用してみます。

「定期的に往診させていただいていた在宅の患者さんは三十一名であった。残念なことに二名の方が亡くなられた。十五名の方が病院や親戚宅へ転出された。Nさんは震災翌日に電話で無事を知らせてくださった。一月二十一日Nさん宅に行く。全く原型をとどめず文字どおりの全壊。よくぞ無事で避難できて本当に良かったと思った。Sさんを尋ねてN小学校へ行ってみる。一足違いで親戚の人が四国へ連れて帰ったとのこと。ここは他県の医師団がいち早く入っていて、点滴をしてくれたとのことだった。心臓病を患いながらなんとか一人で暮らしてきたYさん、体育館に座り込んでいます。相変わらず気丈で一見しっかりしているが、周囲の人の話ではトイレが間に合わず夜間などもう限界だとの事。S病院の先生に電話で頼み込む。快く受け入れていただきありがたい。亡くなられたKさん。家族ぐるみで一生懸命に介護をしてもらえただけに家族のショックが大きい。助かった方にしても、経管栄養の方など

の流動食の供給が不安だった。多くの方に一時避難をお願いせざるを得なかった。紹介状を書いて涙ながらにお別れをした。」

このようにして以後六カ月まで追跡調査をした結果を次のようにまとめています。

●一週間以内に転居、老人ホームに入所できた患者の病状悪化は、全くみられないか、あっても軽度だった。

●一週間以上避難所にいた患者三名は、死亡一名、長期入院二名という最悪の結果となった。

●一人暮らし、または老夫婦のみの患者は、行政により老人ホームが紹介され、震災死の一名以外は震災関連の病状の悪化をみとめなかった。

●家族同居の例では、行政の手がまわらず避難所に取り残されるなど、むしろこちらに病状悪化する者が見られた。

高齢者に耐え難い避難所生活

これを先に述べてきた初期医療との関連でみると、できるだけ早急に避難所に医療班を設置し、緊急に入院医療あるいは保護の必要な人をしかるべき施設に送ることが必要であったことがわかります。

実際、避難所の環境は高齢者にとって耐

え難いものでした。

震災関連疾患について調べた長田区協同病院の資料によると、避難所で肺炎、気管支炎が多く発症し、しかも六十五歳以上の高齢者が多かったとしています。

また、神戸市において震災関連死と認められたのは六百十五人（本年一月十四日現在）。六十歳以上が八割を占めており、六十二%が震災から一カ月以内の死亡である。一方、兵庫保険医協会の調査で、震災直後老人ホームに緊急保護された要介護高齢者の死亡率は低くて、ホーム側も二次災害による死亡を減らすことができたと考えていることがわかりました。

阪神大震災では高齢者に直接の犠牲者が多かったのですが、せっかく生きながらえることができて、その後心筋梗塞や脳卒中あるいは肺炎等の呼吸器疾患で亡くなった高齢者が、神戸市で約四百九十人もいるということです。そして保険医協会の調査結果は、市街地に福祉施設がもっと整備されていたら、震災後に亡くなる高齢者はもっと少なくて済んだことを示していると言えます。

「災害に強い都市づくり」として提案されている内容は、人を守るというより

は都市を守るという方向が強いように思えてなりません。具体的な体験を通して得た教訓をこれからの街づくりに生かしていかなばならないと思っています。

阪神大震災から(3)

月刊労働組合

一九九六年 四月号

やっぱり元のとろろがいい

「やア久し振ります。一年振りますネ。」

「ええ、やっと帰って来れました。ようやく家が建ったものですから。またお願いします。やっぱり灘がいいですワ。」

ほぼ一年振りに診療所を訪れたOさんの言葉です。しばらく神戸市西区の仮設住宅に住んでいました。震災後避難所等から西区、北区あるいはポートアイランドといった、灘区にある私たちの診療所に通院するには不便な遠方の仮設住宅に移った方でも、「やっぱり以前からお世話になってる所がいいです。安心です」といつて通ってくる方が多くいます。

仮設住宅に住んでいる人たちを対象と

した各種アンケート調査でも、「かかりつけ医の所に行く」という人が圧倒的に多く、近くの開業医、病院へ行くという回答は少数です。それは、今までかかってきてその経過をふくめて自分の状態を良くわかってきている、相談もできるという信頼関係もさることながら、いずれは元の所へ帰ってきたいという想いも強いのだと思います。診療室で話をしていると、倒壊した古い木造文化住宅に住んでいた人も、家屋敷を持っていた人も同じように、帰ってきたいと言います。その想いの底にあるのは、その地で暮らしていた時の人間関係や街並みや、いつも買い物をしてきた市場の賑わい等々、前と同じ空気を吸いたいということじゃないかなと思うのです。

仮設住宅の状況はいま

今も仮設住宅で暮らしている人たちが約九万人。その仮設で昨年五月以降ほぼ毎月五人以上の割合で亡くなっていて、一月十二日現在で四十九人となっています。その大半が病死です。

この国では一般国民がどんな形であれ、何人死のうとも単に数字の問題以上にはならないようです。

このような震災で五千人死のうと一万人死のうと数字の問題ではない。それはどういふことか。サリドマイド、スモンと薬禍を起こし、水俣病の解決を遅らせ、今、非加熱輸血製剤によるエイズ禍を起こしているこの国の姿勢がそうなんだということじゃないでしょうか。要するに、企業がもうけて、それを支える政治屋にも金が入って、追従するおべんちやら野郎どももオコボレにあずかると、まあ、この国の資本主義体制を揺るがすことにならない限り、一般国民がいくら死のうと単に数字の問題ではないということ。そしてそのことを、意識しようとしまいと、ボクもあなたも了解しているってことです。

どうも仮設の話をしかけたのにズレてしましました。元にもどします。

どこの仮設住宅も高齢者が多く、若い人たちは昼間は働きに行って、いないので、世話役も六十代、七十代の人に回ってくるようです。

私たちの灘医療生協では、震災後まもなくから、灘区内四カ所で健康相談と血圧測定を行う「街角健康チェック」を行ってきました。そして、仮設住宅に住む組合員の方々の健康状態をはかることと

合わせて、仮設での「健康チェック」活動に取り組んでいます。震災前のデータ等と比較してみると、仮設住宅の人たち、なかでも男性に血圧の高い方が多いようです。年齢差もあるので単純には比べられないのですが、話を聞いてみると、治療を中断したり、薬をひきのばしながら服用していたり、といった実態も浮かんできます。

震災による医療費一部負担金免除措置、通称マル免が昨年十二月で打ち切られました。被災者の多くは国保に加入しているので自己負担金が三割になります。すると、遠方の仮設住宅から従来のかかりつけの病・医院まで電車・バスを乗りついで通院するとなると、交通費もふくめてその費用はかなりの負担になります。事実、マル免の対象者で一月の受診患者が二月と比べて四割も減少していることが、保険医協会の調査で分かっています。マル免打ち切りが、それを必要としている人がいるかどうかとは関係ないところで判断されているので、このようなことになるのですが、これではまるで仮設住宅での孤独死に手をかしているようなものです。

仮設住宅を回ってみると、次第に空き

家が目についてくると言います。なんとか自力で家を建てたり、住む所を見つけた人たちが出ていくからですが、残るしかない人たちの不安はそれだけ強くなってきます。仮設住宅の入居期限が二年となっているのでなおさらです。このような状況のなかで、生活再建のメドが立たないことからくるストレス性の疾患も長期化するように思われます。

不安な新築住宅

激震地区となった旧市街地は、高齢者あるいは経済的弱者にとつて、老朽化してはいるが家賃は安く、物価も安く、人情味もある、何とか年金で暮らしている街でもありました。そこで住居を失って仮設住宅にいる人にとつて、公営住宅を前と同じ位の家賃で提供する以外に移りようがないのではないか。

Ｔさんは、診療所の近く、阪急電車の線路沿いの家に住んでいて、全壊しました。先日久し振りに顔をみせて、「先生、やっと家を建てかえまして。それがネ、電車が通ると以前の家よりも揺れるんですよ。壁土を入れてないから軽いんですね、きつと。」古い家は土壁が塗ってあり、横に数軒くつつくようにして建って

いて、震災の時はお互いがもたれ合うようにして、かううじて倒壊をまぬがれていました。

「戸が閉まりまへんネ」と言っていたのを思い出しました。それにしても新築の家の方がよく揺れるというのは、本当に大丈夫かなと思ってしまう。

Fさんの所は、先日棟上げがすんだところでした。「これで何とか六月頃には帰って来れますわ。はじめ頼もうか思ってた大工さんは、予約が二百件も入ってるんです。いつになったらうちの番になるかわからしまへんやろ。それで止めたんですワ。」

家の補修工事をしたMさんは、「最初の見積りが途中からドンドン変わりましたけど、言い値で払いましたワ。途中で止められたら可憐いませんやろ」と言っていました。きちつとした契約なしで、業者本位でものごとがすすんでいるような感じがします。全てではないでしょうが、なんとか自力で家を建てたりしている人もなかなか大変です。

今、灘、東灘の街を通ると、更地にポツポツと家が建ち始めています。これがどれも似たようなプレハブに毛が生えたみたいな家が多い。工事中の家では、

はすかいは入れてあっても釘が打ちつけてあるものや、簡単なプレートで固定してあるだけというのも見られます。「在来工法の木造家屋でも十分地震に耐えられる家は作れます。ところが、はすかいにしてもその意味が分かってすっかりした固定法をとっている家が、今建築中のところを見て回っても非常に少ないです」とは、ある建築士の話。

こうしてみると、何だか同じような地震がくると、一般市民の住いはまた同じように壊れるんじゃないかと心配になります。

震災の直接死亡者の七十七%が圧死・窒息死であったということは、どんな住宅に住んでいたかが直接の大きな規定要因になっていることを示しています。従って、今仮設住宅にいる人たちも含めて、市民が安心して暮らせるように街や住宅を整備していく、そのために公的な負担や援助をしていくのは、この震災から学んだ行政の当然するべきことだと思っ

ですが。

あれから五年……

助けあい、支えあう

協同の街づくりに向けて

あれから五年……

あの悪夢のような阪神・淡路大震災から五年が過ぎました。四六、六〇〇世帯を数えた仮設住宅は解消され、復興住宅が市内各地に建設されました。公共団体や大企業の施設の復旧は着実に進みました。しかし、被災した市民は未だ生活再建の途上です。再開発・区画整理地域ではこれからが本番。自力再建した人には借金が重くのしかかり、賃貸住宅の人の家賃軽減措置が切られるのは時間の問題です。そして、なにより大多数の市民が何の公的援助も受けずに自力で生活再建に取り組んでいます。

あいかわらず開発を優先する行政

この間行政は震災を教訓とせず、市民生活よりも開発を優先してきました。「なぜいま空港なのか」という三十五万人の署名を無視して、神戸空港計画が強行されています。一方、四月から始まる介護保険では、市の保険料は全国平均を上回る三、二七〇円とされ、「これが被災地の保険料か」との声があがっています。また、震災は、義援金と自助努力にまかせる政府の災害対策の不十分さも明らかにしました。

「震災は終わらない」

震災五周年を迎えて、さまざまに検証が行われていますが、震災は終わったわけではありません。積み残されてきた課題の解決に向けて、今まさに正念場を迎えています。震災を機に運動が広がった、開発優先の行政を変える取り組みは、「住民投票」から「市長リコール」へ向かっています。また、被災者への公的援助を求める運動は、「被災者生活再建支援法」を成立させ、さらに制度拡充をめざして、「生活基盤回復支援法」制定に向けて歩み出しました。

組合員の皆さんといっしょに

灘医療生協は震災以降、訪問看護ステーションすみれ、老人デイケア施設クリニックつどい、ホームヘルプサービスあおぞらを開設するなど、福祉分野の事業活動を拡充してきました。一方、神戸空港・住民投票運動や被災者への公的援助を求める運動に、積極的に取り組んできました。いま、震災から五年間の取り組みに確信を深めるとともに、こんごいっそう組合員の皆さんとご一緒に、助けあい、支えあう協同の街づくりに向けて、取り組みを進めていきたいと思います。ご協力をお願い申し上げます。

二〇〇〇年一月十七日

灘医療生活協同組合・理事会

編集後記

●震災から十年。

当時中学三年だった長男が二十五歳、次男が二十歳になった。私もそれだけ馬齢を重ねた訳だが、一月十七日の激しい揺れとその後の日々は、今でもかなり鮮明に覚えている。変わってゆくものと、変わらないもの。変わってはいけないものを見極めなければ、と思う。(鳴)

●あの地震から十年経ちましたが私の周りにも今も苦しい生活を強いられている人が多くいます。そして昨年はまた大きな災害が日本各地で起こりました。自然災害の前には人間は無力な存在だからこそ、助け合い支えあって生きていかなければいけない。取材をしてもう一度自分に問いかけました。あの震災で多くの犠牲になられた方達、そして生き残ったものとしてどういう生き方をするべきか。少しは人の痛みがわかる人間になれたか。(岡)

●湯沸かしボランテアに始まり、被災労働者の労働相談、被災地メーデー、「公的援助法」実現運動、仮設・復興住宅実態調査、住民投票連

動…、十年間、「震災」にこだわり続けてきた。このたびの『十周年記念誌』編集に関わらせていただいたことに感謝。(小)

●毎年、一月十七日が近づいてきまると、地震の怖かった事を思い出し、体が引き締まる思いがします。あのときから早十年、街も大分復興して参りましたが、震災の後遺症はまだまだ残っています。NHK朝の連続ドラマ「わかば」のように笑顔とフアイトで前向きに頑張っていきたいと思っています。(出)

●震災の時は、私はまだ愛知の実家で震度三。早朝に飛び起きたのを覚えていいます。テレビでも神戸の震度だけが表示されず、学校から帰ると不気味に燃える長田の街が繰り返し報道されていたのを思い出します。何の前触れもなく地震は起こり、生活は一変する。その一面を編集に携わることで見せていただいた気がします。(羽)

●ファミレスで子どもにももらったオレンジジュース、バケツリレーによる消火活動、成徳小で最初に配られた一本のバナナ、安否不明の義父母を探し回って東灘小で再会できたこ

と、患者さんから譲りうけた入浴券で行った銭湯、御幣島仮設で独り亡くなった叔父、全国各地から続々と届いた義援金と支援物資。どれもこれも忘れることのできないことばかりです。(森)

二〇〇四年八月、震災十周年記念事業の一環として、ろっこう医療生活協同組合は記念誌を発行することを決定。そして九月(十一月、機関紙「健康いちばん」を通して組合員の皆さんにご協力を呼びかけました。その結果、三十五人から原稿や写真などをご提供いただき、編集委員会では選考のうえ、記念誌としてまとめさせていただきました。ご協力いただいた皆さん、本当にありがとうございました。

編集委員会

委員長 鳴海 妥
委員 岡本 秀美
出口 和美

小林 るみ子
羽田野 祐司
森本 浩

大震災から10年 変わりゆく街で

2005年1月17日 発行

編集 阪神・淡路大震災10周年記念誌編集委員会
制作 株式会社 ジューサン
印刷 神戸オール出版印刷株式会社
発行 ろっこう医療生活協同組合
神戸市灘区水道筋6-7-11
TEL.078-802-3424
<http://www.rokko-mcoop.or.jp/>

領価 500円

神戸大学社会系図



0102004058108

